【研究ノート】

横浜浮世絵と描かれた港崎遊廓

吉井　大門

【キーワード】横浜浮世絵、港崎遊廓、開港

はじめに

本小稿は、横浜市歴史博物館において開催した（令和五年〔二〇二三〕三月十八日～五月七日）企画展「浮世の華 描かれた港崎」について、図録等の展覧会記録を作成しなかったこともあり、その準備段階に際し調査・収集した情報の一部を改めてまとめたものである［註一］。

いうまでもなく現在の横浜は、安政五年（一八五八）六月十九日に締結された日米修好通商条約により、翌年（一八五九）六月二日の開港を契機としてはじまった。それまで一寒村地帯であり、関内には横浜新田、太田屋新田、関外には吉田新田、さらに北には平沼新田など江戸時代に開拓された田畑とその間に入海や沼地が点在した地形であったところ埋め立てられ街の基礎が造られていった。海側から海岸通・北仲通・本町通・南仲通・弁天通と主要な町筋、そして神奈川運上所とその北側の波止場を中心に西を日本人居住地、東を外国人居留地として市街地が瞬く間に造られていった。こうして誕生した横浜の街の都市計画の一つとして安政六年埋め立てられた太田屋新田に港崎遊廓が誕生する。その場所は、現在の横浜公園内の横浜スタジアム付近であった。

幕末の横浜に誕生した遊廓に関する資料については、これまであまり紹介がなされてこなかった。それは資料の少なさという理由も相まって遊郭研究自体あまり進展をみなかったともいえるだろう。ゆえに本稿においても同様に、横浜の初期遊廓の全容を明らかにするには十分とは言い難い点はあらかじめ付言しておく。現状、資料と基礎的な史実の蓄積が求められる段階にあり、大局的には横浜の遊廓の輪郭を把握するアプローチの一端となり、先の展示で判明した情報が、今後の横浜開港史、都市論、遊廓史研究の一助をなすことができればと考える。そのため本稿では、初期の横浜遊廓関係資料の紹介と横浜浮世絵を取り上げ若干の考察を加えるものである。

先行研究と展覧会

資料同様に先行研究も少ないとはいえ、近年の研究をみると、横浜初の遊廓である港崎遊廓が安政六年開業し明治初年までの経過と

特徴を大阪・松嶋遊廓、東京・新嶋原遊廓との比較から居留地付き遊廓の歴史的位置を論じた佐賀朝氏「居留地と遊廓社会」がある〔註二〕。続いて、開港場における遊廓の設置を、幕府の対外政策の一環と捉え論じた阿部保志氏「幕末の遊廓」である〔註三〕。いずれも、開港場横浜の都市空間において初期の遊廓が社会構造とどのような関係にあったかを歴史学、社会史的アプローチから遊廓を論ずるものとなっている。

一方、展覧会においては、これまで港崎遊廓すなわち横浜の遊廓史を展覧会のメインテーマとして体系的に取り上げた例は、過去にはなかったが、横浜開港資料館で開催された「横浜浮世絵 よみがえる幕末・明治の町づくり」において部分的に紹介されている。その関連の論考として〔註四〕、本稿で全体像を紹介する遊女の手紙が「遊女の手紙と遊郭関係資料」として一部紹介され、あわせていくつかの資料が紹介されている〔註五〕。

次に、横浜の開港史において必須とも言える『横浜沿革誌』、『横浜開港側面史』、『横浜開港五十年史』、『横浜市史稿 風俗編』である。特に『横浜市史稿』は、港崎遊廓から吉原町遊廓、高島町遊廓、そして永楽・真金町遊廓に至る歴史的変遷が詳しく記され横浜遊廓史を知るための基礎文献かつ最重要書籍である。

また『神奈川県史 資料編』、『大日本古文書 幕末外国関係文書』および同附録『村垣淡路守公務日記』は一次史料を定本とした基礎文献として遊廓史のみならず幕末開港史、横浜の歴史を語るうえでも欠くことのできないものである。こうした基礎文献とともに付け加えるとするならば『市史稿写本』「岩亀楼関係記録」がある。同資料は岩亀楼を開業し港崎町の名主となった佐藤佐吉が太田屋新田を自費埋め立てした経緯や明治に入り遺族が内務省に権利関係の賠償を請願した際の関係書類など四巻からなるものである。土地の変遷や裁判記録など重要な内容を含んでおり詳細な分析が期待される。以上のような資料のほか、『横浜の遊廓の研究（未定稿）』、『横浜どんたく 下巻』などがあり横浜遊廓史を語る上で示唆に富んだ内容となっている。

こうした文献資料から絵画資料に目を転じると横浜浮世絵があげられる。遊廓は浮世絵の主要な画題であったことはよく知られており、横浜浮世絵においても横浜の街づくりと変化の過程を伝える画題として取り上げられ、横浜浮世絵をテーマにした展覧会でも紹介されることが多い画題である。しかし視覚資料としてしばしば取り上げられてきたが、描かれた画題の検討や現在の場所との関連・関係の比較にとどまっているように思われるのが印象である。

以下、遊廓という制度やその都市空間における社会構造の役割については、専門領域の諸氏に譲り、まず港崎遊廓の建設を概観し、次に横浜の初期遊廓の実態を補完できるよう横浜浮世絵および遊廓関係資料を取り上げる。

港崎遊廓の建設

港崎遊廓開発の経緯は『市史稿』や先の阿部氏、佐賀氏の論考にもすでに詳しく、ここでは諸氏の先行研究をもとにその経緯について確認しよう。

安政五年六月二日の開港後、横浜を開港場とする幕府の方針は決

定したがその建設は同年秋になっても進捗をみなかった。そうした状況において、老中は十月二十三日水野忠徳、永井尚志以下の外国奉行に神奈川奉行兼帯を命じ、横浜を開港場とする建設計画実施が決定された〔註六〕。それにあわせて外国奉行は開港場への遊廓建設を進めていく。これについて外国奉行の最初の伺書は不明とされるが〔註七〕、『市史稿写本』「岩亀楼関係記録」によると、同年十一月遊廓の設置を発表して希望者の出願を促したという〔註八〕。

安政六年正月十六日、幕府は横浜での貿易開始を公布し、商売を希望する人々へ申請をするように全国に達し三月三日、開港場建設計画を決定した。建設計画の具体的内容は詳らかではないが同年三月発行の銅版「横浜開港見聞図」を写した「横浜開港地割ノ図」（横浜市中央図書館）【図一】をみると日本人町となる場所は、「此辺一円町割出来」と書かれ、運上所建設位置なども確認できる。画面左下には「此辺遊女街取建地所」とあり、遊廓の位置は山手付近にある。どういった経緯でそのような計画になったか不明ではあるが三月四日、外国奉行村垣淡路守等は横浜の蔵徳院辺りから「遊女町之地所見分」〔註九〕を行い、その調査をもとに老中に宛てて、遊女町建設地は山手付近であったが取り締まりにも関係するため外国商人へ地割し海岸より離れて市中と懸隔した、大岡川筋太田屋新田の地が良いとなり四月二十八日、幕府の承認を得て、埋め立てを開始〔註一〇〕、その間の三月江戸・新吉原の規則等の調査を行っている〔註一一〕。

この後に港崎（みよざき）と名付けられる遊廓の建設事業は、品川宿旅籠屋佐藤佐吉【図二】〔註一二〕・五兵衛、神奈川宿旅籠屋善二郎、下総国香取郡下小川村名主愛次郎、江戸本石町三丁目金三郎に太田屋新田内一万五千坪の土地を貸渡し、安政六年三月から突貫工事によって沼地であった太田屋新田を埋め立て建設が進められていった。しかし工事は難航、さらに資金難や離脱者が相次ぎ佐吉に一任となるも〔註一三〕、期日の六月二日の開業は間に合わず、応急の対策として駒形町に建設した外国人用長屋を転用し仮宅をもって営業が開始された。間口六間（正面の幅約十一ｍ）、奥行き五十八間（約一〇五ｍ）の建物二棟と間口十八間（約三十二ｍ）奥行き三間（約五・五ｍ）大門口には「御免遊女廓港崎町仮宅」と墨書した標柱がたてられたという〔註一四〕。

そして六月十日の営業開始には「遊女町仮宅今日引移ル直ニ今晩異人六人参ル由」と記され〔註一五〕。佐藤佐吉の岩亀楼のほか、出生楼、五十鈴楼、泉楼、保橋楼の五軒が開業し、茶屋、料理屋、会所見番が立ち並んだ。

駒形町仮宅がどういった状況であったかは、「安政六年未年七月改御交易場所附并諸商人軒数明細書」【図三】に仮宅の区画が記録されており。大門口の左側には出世楼、井筒楼、泉楼その向かいに会所、異人揚屋 岩亀楼、見番、茶屋、料理屋、保橋楼が並ぶ〔註一六〕。そして十一月十日、江戸新吉原を規範として一応の完成をみせ、翌万延元年（一八六〇）閏三月、本格的に営業が開始された。『横浜沿革史』によると港崎は「ミヨザキ」ナレドモ、俚諺「コウザキ」とある。船着き場を意味したというが、「みよざき」という音韻については詳らかにならない。

遊廓建設は、建前上佐藤佐吉らの普請によるものであったが、開港場横浜が幕府によって設計された近世計画都市であるという前提にのっとるならば〔註一七〕、外国人を引きとめ、経済活性化を促し横

浜の繁栄を計ろうとする意図があったと考えられる。港を背にし、外国人居留地、日本人町、中心の運上所、その動線を外れるように中間に位置する遊廓という都市構造。さらに、遊廓という場における経済循環による外貨の獲得という点まで視野を広げても問題ないであろう。

それは遊廓という場に集まる日本人と外国人が遊興に利用することから生まれる生産と消費、そこに携わる様々な職業や流通による経済効果があげられる。また、政治的、あるいは経済的な交渉の場としての役割もある。長崎丸山遊廓が有した日本人と外国人のトラブルの回避といった治安維持機能もあげられるだろう。そして当時の男性中心の社会状況において、幕府は江戸、大坂、京都、長崎において、公認の遊廓とそれを担う傾城町を通じて性秩序の維持を図ったように、同様の役割を担わせた。横浜の街はゼロから造られ、時の為政者による新たなイデオロギーを体現し、横浜に新たに構築される社会全体を統治する装置として遊廓を考えるならば、港から流入する新たな文化、運上所を中心に、外国人居留地と日本人町という洋と和の分離、それらを繋げるように街から離れて存在する港崎遊廓という構図によって成立可能であったと考えられる。[註一七]

しかし、慶応二年（一八六六）の大火により居留地整備は大幅に見直され、同年十一月二十三日『横浜居留地改造及び競馬場墓地等約書』（第二回地所規則）により移転を余儀なくされ一時、太田町仮宅期間を経て、関外の吉田橋を渡った吉田新田内の埋立地、八千坪に慶応三年（一八六七）五月、大門内を吉原町として再建された。しかし再びの火災により鉄道開通に伴い埋め立てられた高島町へ明治五年（一八七二）移転開業。そしてその後真金町・永楽町へと転じていった。

横浜浮世絵

絵画は文字では明瞭にすることができない生活や風俗の現実の一端を表現するが、描かれる情報すべてが史料になり得るものではないということを忘れがちである。そこには画家の意識や芸術的欲求、同時代の社会から求められるものを表現しようとする意識、つまり「まなざし」が包含されている。つまり当時描かれた風俗が必ずしも、当代風俗を表現しているとはかぎらないということである。浮世絵の場合、そうした画家の「まなざし」に版元の意向も盛り込まれることになる。

本節で取り上げる横浜浮世絵[註一八]の場合、横浜の版元もあるが、ほとんどが江戸の版元であることからも、主な浮世絵の観賞者は江戸市中の大衆であった。時事性、報道性が高いといわれる横浜浮世絵においても、描かれた内容は画家の「まなざし」というフィルターと版元の意向を通してつくられたものになる。

また当時、幕府を批判する内容や風俗上問題がある絵の出版を禁止する検閲があったため、版元そして浮世絵師たちは様子を伺いながら制作をしていた。つまり横浜浮世絵に描かれた港崎遊廓も単に華美な浮世絵と捉えるのではなく、何を意図して制作され、当時の民衆が開港場横浜をどのように把握し認識し、そしてしようとしていたのか、作り手の意図と享受する側の意識を見据えてみることも必要であろう。

横浜浮世絵は開港の翌年、安政七年（一八六〇）二月から明治五年頃まで八〇〇点以上描かれ、そのうち約半数は文久二年（一八六二）までの約二年間に発行され、以後その数を減らしていった。そこには、開国とともに流れ込む西欧文化や街の変化、つまり変動する社会が写しとられていった。その主な主題は外国人、流入した風俗、建築、刻一刻と変化する横浜の街などその題材は多岐にわたり、ある種のムーブメントであったことはあきらかである。

横浜浮世絵において港崎遊廓が描かれる作品を抽出するとその傾向や内容は大きく五つに分類可能だ。

①街並みとともに遊廓を作品の中心におくもの
②横浜の都市空間の一部として描かれるもの
③遊廓を背景にして人物を大きく配置するもの
④絢爛豪華な遊廓の屋敷内で遊興に行じる外国人など
⑤双六

なお本稿では現在把握されている横浜浮世絵から港崎遊廓に関連するものを〔表一〕に全容を示すが、②については、いわゆる鳥瞰図的なものでその数は多く抽出するに際しては、廓名が記されたものをとりあげた。以下横浜浮世絵において初期横浜遊廓つまり港崎がどのように描かれてきたかいくつかの作例を取り上げみていきたい。

横浜浮世絵において港崎遊廓が描かれるのは、横浜が街として完成をしていく安政七年二月からである。太田屋新田の湿地帯、港のはずれに出現した港崎遊廓は、開港場に流入する新たな文化とともに、人々の大きな関心ごととなり、浮世絵師たちにとっても興味をひかれる画題のひとつとなった。「神奈川横浜華郭之光景」【図四】は「神奈川横浜新開港図」とともに横浜浮世絵を語る際、嚆矢となる作品である。横浜浮世絵の最初の一点が遊廓を主題とすることは象徴的であり、港方面から廓内へと続く衣紋坂から吉原道を描き画面右に大きく港崎遊廓が低い視点で描かれる。遊廓の港側には岩亀楼の文字のみ見えまだ他の遊廓の名はみられない。

同じく同年閏三月発行の「神奈川横浜新湊港崎町遊廓花盛之図真景」【図五】は、遊廓内から仲の町、大門をみる構図である。桜が満開の廓内に賑やかに人々が往来する様子が描かれている。桜花には美しいカラ摺りが施され、画面左上の大門から右斜め下に広がるように伸び、仲ノ町、桜並木右手には岩亀楼と五十鈴楼が描かれる。しかし『横浜細見記』（万延元年五月）など廓内を描いた図や説明には、岩亀楼の隣に五十鈴楼は併設されず、五十鈴楼は大門口を抜け最初の角を左に曲がりその突き当たり海側に位置している。本格営業間もない遊廓に貞秀ならではの想像力を盛り込み描かれている。イメージソースとなる先行図様として葛飾北斎『東遊』「新吉原」などを想起させる。貞秀は足を運び実地の景色を見ることによる作画が多い点においても、時の横浜の状況を画家の創造力によって補完し制作したとも考えられる。横浜の街や眺望を詳細に描写した貞秀の浮世絵ならではの作品であり、開港期の一時期横浜に住んだ説もうなずける。

①に続き②の俯瞰的構図をみていこう。本町五丁目から金毘羅を左手に衣紋坂を進み高札場の角を曲がると大門入口があり港崎遊廓という構図が横浜の街の変化とともに描かれるのを基本とし微細な

変化が描かれる。例えば「再改横浜風景」【図六】は、文久元年になると太田屋新田へと続く港崎遊廓への道沿いには茶屋店が並び、大門を入った突き当りには開業当初はまだなかった金毘羅社の存在が確認できる。

次に③は、伝統的な浮世絵の三枚続の表現方法つまり、風景表現を背景に、一枚に一人ずつ美人を描く様式によって構成される。三枚続の背景には、開港場横浜を象徴する記号として、海や船、遊廓内、特に岩亀楼内部が描かれることが多い。この類には「源氏之君花街遊覧 岩亀楼」【図七】、「横浜廓中之図」、「横浜港崎町楼上之図 岩亀楼繁昌之図」などがある。遊女の着物にあしらわれた紋様や、横浜の海、桜、廓内の様子など、絵に散りばめられた記号は主題のみならず受容者に様々な角度から興味を引き立てる効果を演出するものとなっている。

この種の浮世絵は岩亀楼やその遊女を描く作例が多いなか、「五十鈴楼内之図」【図八】は、やや趣を異する作品である。描かれるのは鈴木屋善次郎の開業した五十鈴楼の抱遊女である。右から「すず濱」、「すず人」、「すず若」、「すず嶋」であり『横浜細見記』（万延元年五月刊）にも名前がみられる「呼出し」である。画面右手の花魁の打掛には岩亀楼の桐紋、背景に富士山が描かれることなどから、国明自身は、廓中の詳細や横浜の地理関係について把握していなかったのだろう。現在確認されている港崎遊廓を扱う横浜浮世絵の主題がほぼ岩亀楼であるなか特異なものであり、本作は五十鈴楼の入銀ものとも考えることもできる。

④は定番の美人画形式の構図から、やや視点を広くとり遊廓の内部を写しだし、日本人や外国人が遊興をする様子を廓内建築の華やかさとともに描きだす。「横浜岩亀楼上」【図九】、「横浜港崎廓岩亀楼異人遊興座敷之図」、「岩亀楼並ニ異客之図」などがある。また興味深い作品として、すでに『集大成横浜浮世絵』でも紹介されている「画稿 外国人遊興 横浜拳」【図十】は「ちょんきな〳〵、ちょん〳〵、ちょんが、何のその、ちょちょんがよいやさの」節にのせて遊んだ横浜拳、いわゆるチョンキナ踊りにあわせてジャンケンをして、負けたほうが一枚ずつ着物を脱いでいく港崎遊廓で流行したお座敷遊びが描かれる。当時はまだ出版統制があったため、発行にはいたらなかったのであろう。「画稿 外国人遊興之図 裸踊り」【図十一】もお座敷遊びが描かれ同様に発行されなかったと考えられる。それぞれ岩亀楼の扇の間、座鋪の間と思われる室内に遊興の様が描かれている。

⑤は港崎遊廓が描かれる双六である。「横浜本町港崎町振分双六」【図十二】は、横浜本町の商店と港崎に並ぶ遊廓をマスにし、港崎町入口の大門を振り出しに、廓内の妓楼を描き花魁と外国人が向かい合う上りへと向かう。この種の振分双六は、サイコロの目によって決まる行先に従って進むものである。区画されたマスには、遊廓の情報が盛り込まれ、遊びの要素だけではなく、まだ見ぬ港崎遊廓の情報伝達をするメディアとしての機能も担われた。「萬国入舶壽語録」は波止場を振り出しに岩亀楼の扇間を目指す、前作と同様の振分双六で岩亀楼扇面の間で遊興に興じる外国人と遊女で上がりである。

絵双六はあるテーマに沿って描かれたマスを進んで上がりを目指

すもである。例えば来世のあこがれを描いた「浄土双六」を早いものとして、「道中双六」や「出世双六」といった、まだ見ぬモノや場所への憧れを描いた絵双六が制作された。そしてサイの目を振りながら各マスに描かれる事象を疑似体験しながら「上り」を目指していく。港崎遊廓を描いた双六もまたある種の憧憬をもって享受され、遊廓そのものが開国場横浜において象徴的な場として、認識されていたことがわかる。

そのほか珍しいものとして大きくは④に分類されるが「横浜岩亀楼」【図十三】をあげておこう。七福神である「神様」が遊興に興じる様が描かれ、それが本作の利かせどころとなっている。台のものを担いだ坊主禿と遅れて入ってきた恵比寿天以外は円卓に座っているが、弁才天のみ立ち姿である。とすると女性である弁才天の立ち姿は遊女、唯一日本の神である恵比寿天は日本、円卓を囲むそのほかの七福神は外国人と考えられ、なにやら暗示的であり、そうならば浮世絵のもつ戯画や風刺画の伝統が存分に発揮されたウィットに富んだ作品となっている。

また摺物として「港崎廓岩亀楼 配手拭袋」【図十四】、「横浜廓港崎町 岩亀楼一覧」【図十五】がある。前者は客用に配る手拭いを包んだもので当時、岩亀楼内の舞台において評判であった娘手踊りの演目「石橋」と「蝶舞」を組み合わせた「蝶小蝶舞花港崎」であり、それに因んだ図が描かれる。画は国盛（二代）が手がけている。国盛（二代）は厳密に横浜浮世絵といわれるものは描いていないが、本図がそれにあたる。賛は「佐藤佐吉肖像」と同様あし園によるものである〔註一九〕。後者は三味線弾き、酔っ払い、そして扇をもって踊る三匹の亀が描かれる。華やかに描かれる港崎遊廓の絵画表現がほとんどであるなか、岩亀楼の亀をキャラクター化した珍しいものである。おそらくは土産物など、何らかの包紙として使用されたものであろう。

以上みてきたように、横浜浮世絵に登場する遊廓はほとんどが港崎遊廓の時代の発行である。そして、その多くが岩亀楼を主題とするものであり、また『横浜土産』、『みなとのはな 横浜奇談』といった版本類においてもこうした主題性は共通し、さながら描かれた港崎遊廓は岩亀楼の遊廓とも言い換えられ、発行されていたといっても良いほどである。

「描かれた港崎遊廓」は、いうなれば主たる情報を過度に表現したものであり、受容者たちの欲望を満たすための装置として十二分に機能したと考えられる。当然横浜浮世絵の一過性や内容からすれば他の主題も同様であるが、しかし横浜浮世絵というある種虚構の入り混じった描かれた港崎遊廓からは、社会システムとしての遊廓の影の部分は削ぎ落される結果となったと言えるだろう。そうした当時の社会状況からこぼれ落ちた事象を拾い上げる作業も必要であろうし、港崎遊廓という場に対して何を求め、どのような認識を持っていたか、作者の意図とそれを受け入れる受容者の意識を見据えてみることは重要であると考える。

遊廓関係資料

本節では、遊廓関係資料からその内容いくつか紹介する。展示で紹介した横浜開港資料館の資料のうち港崎遊廓以後の資料も含むが

以下「遊女の手紙」、「遊女直段附并歩合割取究之事（写本）」、「港崎町大火の節娼妓立退の件」、「覚 遊女奉公」を取り上げ委細を紹介したい。

（1）「遊女の手紙」【図十六】【資料一】

全十一通のうち駿河屋彦七なるものへ宛てた手紙が六通、「かつよりはなおかや彦七」「大加より谷」「たいより大のやおかつ」宛各一通、不明二通の計十一通が残されている。「岩亀 ことより するがや彦七宛」はひらがなを用い駿河屋彦七へ再訪を願う内容がつづられている。「花之助より 駿河や彦七様」は再訪を願う内容とともに金子の無心が書かれている。花之助の名前は『横浜吉原細見記』（明治二年〔一八六九〕刊）に岩亀楼の呼出として名前がみられるが同一人物かは不明である。「神風楼内雲井より するがや彦七」に対して先だっての来訪にかまうことのできなかった詫びと、その後の来訪に会えず、どんたくの夜に会うことができればといった内容となっている。概ね全体を通して馴染みの客への再訪を願う内容となっている。

（2）「遊女直段附并歩合割取究之事（写本）」【図十七】【資料二】

本資料は「写本」としてあるもので、その元史料は明らかではない。『横浜市史稿 風俗篇』には「安政六年御用留」として遊女揚代が掲載され、その内容と類位する点が多い資料である。今後、詳細な検討が必要だが、その概要は、日本人の揚屋座敷代、上中下の遊女揚代にはじまり、「異人客揚屋行之分」として座敷代酒食賄料、遊女揚代、商館行代などが記される。遊女の位や新造の昼夜、遊女、芸者、子供手踊に対して日本人、外国人そして時間によって細かく料金の設定が記されている。また異人より金銀、品物を貰い受けた場合の対応についてなど書かれている。

（3）「港崎町大火の節娼妓立退の件」【図十八】【資料三】

慶應二年の大火後、類焼した港崎遊廓の遊女屋のその後の立ち退き先や人員数などが記される。『横浜吉原細見記』に名前がみられる松金屋、川泉屋など確認でき、抱主名と抱遊女名ともに移転先が記されるなか、「逃去」などの記述もみえ遊廓の実態の一部を垣間見ることができる。

（4）「覚 遊女奉公」【図十九】【資料四】

慶應三年（一八六七）に江戸飯田町の「かね」こと「松尾」が六十両で売られた時の記録で、裏面に「まつかねや 幸兵衛」とある。松尾という名は『横浜吉原細見記』の松金屋に合印山形星二つの呼出しとして確認できることから同一人物とも目されるが定かではない。遊女の奉公は、実質は「身売り奉公」という人身の売買であり雇用労働契約の形をとることで、合法性が担保されていたという。

おわりに

以上みてきたように、初期横浜の遊廓であった港崎遊廓について横浜浮世絵と歴史資料を軸に概観してきた。冒頭で提示したとおり横浜の初期遊廓の全容を明らかにするには十分な検証と分析がされたとは言い難い点は冒頭で述べた通りであるが、「資料の少ない横

浜であるからこそ、都市社会の分析に都市空間の復元成果を重ね合わせることが有効になる」と指摘されるように〔註二〇〕、そのための資料と基礎的な史実の蓄積により横浜の遊廓の輪郭を浮き彫にする一端となることができればと考える。また横浜浮世絵においては、先学研究から記録性が高く評価されているが、多岐にわたる主題と短期間に発行されたその多さから描かれた各主題や内容、それらがなぜ興味を持たれ視覚資料として制作されたかといった絵画流通そして受容の問題など、より詳細な検討は深まっているとは言い切れない。しかし近年は名所の視点から横浜浮世絵を考察する試みもみられ〔註二一〕、そうした研究の蓄積によって、ある種ポピュリズム的側面を持つメディアとしての浮世絵から当時の社会状況そして遊廓という制度のみならず開港期の横浜をより一層リアルなものにしてくれると考える。

〔註〕

一　本展のタイトルは当初「横浜浮世絵　描かれた港崎遊廓」であったが、諸般の事情により変更することとなった。歴史的事実において、言葉のみから受けるイメージのみからではなく、そこに包含される背景を伝えることも博物館の活動の一つであると考える。

二　佐賀朝「居留地と遊廓社会　横浜・大坂・東京を素材に」『都市史研究』五号、都市史学会、二〇一八年十一月二十五日、

三　阿部保志「幕末の遊廓　開港場の成立に関連して」『地域史研究はこだて』二十五号、函館市史編さん室、一九九七年三月三十一日

四　会期二〇〇七年四月二十五日～七月二十九日

五　石崎康子「遊女の手紙と遊郭関係資料」『開港のひろば』九十七、横浜開港資料館、二〇〇七年八月一日

六　『大日本古文書　幕末外国関係文書之二十一』「仰付候得共、当節差向候急務ニ而、不容易大業之儀ニ付」。『横浜市史　第二巻』有隣堂、一九五九年三月三十一日

七　『横浜市史　第二巻』有隣堂、一九五九年三月三十一日

八　「岩亀楼関係記録」『市史稿写本』

九　「今般提供仕候第五号證安政六未歳三月付遊女廓取建起立並廓内取締議定書ト題スル記録綴本ノ内容冒頭に、安政五年亜米利加、英吉利、仏蘭西、阿蘭陀、魯西亜、右五カ国於神奈川表貿易御差許同所御開港ニ相成候段同年十一月中被仰出遊女廓御取建ノ趣ニ付廓取建方進メ候モノ有之評議ノ上決定イタシ翌未年正月十八日御支配御代官小林藤之助様、御役所願出候處、外国奉行永井玄蕃頭様エ御差出シニ相成、其節御調役今原猪三郎様、御徒目付衆御立合ノ上願ノ趣御調ニ相成、其後外国奉行水野筑後守様、御役所ニ御調、高須鉄次郎様御徒目付衆御立合両度有之候間、三月五日御調役成瀬善四郎様御旅宿へ着御届イタシ候處、再應御尋有之候上ニテ我等共外ニ神奈川宿旅籠屋四拾貳軒惣代善二郎下総国下小川村名主愛次郎本石町三丁目村蔵地借金三郎右五人ノ者共一同被召出遊女廓取建方願ノ通被仰付太田屋新田地内ニテ地所壹萬五千坪御渡ニ相成御請證文差上候夫ヨリ一同示談ノ上地割致シ双方書付鳥取替速ニ埋立方取掛リ候」

一〇　「村垣淡路守公務日記之十五」『大日本古文書　幕末外国関係文書附録之六』「八時頃ゟ筑後・綾部（堀利熙、外国奉行）・自分一同、陸通芝生村ゟ横濱ニ至、蔵徳院邊ニ而遊女町之地所見分、徳左右衛門方ニ而小休、隠岐守と落合、辨天脇ゟ小船ニ而暮合頃本陣江歸ル」

「安政六年三月　三三八　外国奉行上申書　老中へ　横浜表遊女町取建地所の件」『大日本古文書　幕末外国関係文書之二十二』

「御開港場江遊女町取建候儀、伺之通相濟候処、海岸通りハ、御取締ニ茂拘り候、ニ付、移住商人共江割渡、別紙（所見ナシ）繪圖面之場所は、海岸

ら道程相隔、市店と懸隔、大岡川筋打廻し、御締筋も宜鋪、相當之地形ニ相見候間、御開港御用取扱候向々申談候処、一同存寄無之旨、申聞候ニ付、遊女町之儀は同所江取極申候、尤渡世筋規則之儀は、猶追々取調、相伺候様可仕候、依之此段申上候」

一一　「三四一　三月外国奉行掛合書　町奉行へ　神奈川表遊女町の件」『大日本古文書　幕末外国関係文書之二十二』東京帝国大学蔵版、東京帝国大学編、一九三四年七月十五日、東京帝国大学文学部史料編纂所

一二　岩亀楼の桐紋のついた羽織姿で描かれる佐藤佐吉であり、その羽織の紗綾形地紋は長寿延命を意味することから、寿像として描かれたとも考えられ、浮世絵系の画風を示すことから、横浜浮世絵を手がけた画家とも考えられるが作者は不明。賛は「岩亀楼配り手拭い袋」【図十四】に書かれる「蝶胡蝶花港崎」の長唄の歌詞を手がけた人物でもある「あし園」による。本図の賛は以下の通り

「爰に佐藤氏のあるしは今年初老をあまし安政三／末の孟春不斗心付て異国人の遊閣を作らしめ舞（む）と／「爰に佐藤氏のあるしは今年初老をあまし安政三／末の孟春不斗心付て異国人の遊閣を作らしめ舞（む）と／おふ屋家の言葉を乞て横浜太田新田と云へる／三十丈に余れる深き沼を埋立世に稀なる高楼を／出来ひ則是を岩亀楼と名を触港嵜の廓と／号し繁栄の地とはなりて来る春毎に雛鶴の／色とならふる松の飛客に遊へる蓬莱の尾を／こらし亀に浦嶌か昔し語りにも都々の廓々にまさり／我てふは云ふにや及唐の果迄もひの都は港崎の／廓といわしむこと蒼天に輝きぬるはまれなり／されは光る君とやいわんか即是を契ら舞（む）も冨貴／自在壽命長久と随ひかして一章に侍ることのみ／岩たらし巣を組む／鶴や松のひ七十四童　あし園如亭述」

一三　その辺りの事情は「岩亀楼関係記録」『横浜市史稿写本』に「第五號證安政六未歳三月付遊女廓取建起立並廓内取締議定書」と題する記録の写しを引用し詳細に説明されている。

一四　横浜市役所編『横浜市史稿　風俗編』名著出版、一九七三年十月十六日

一五　「村垣淡路守公務日記之十六」『大日本古文書　幕末外国関係文書附録之七』

一六　『横浜市史稿　風俗編』においても本資料を基に駒形町仮宅を図示しているが、この点について『横浜市史稿』では名古屋藩澤田庫之進の安政六年の日記『錦園随筆』と対比し本資料との相違を指摘しているが概ね当時の状況と施設を把握できるとし応急の施設であることからも多少の誤りはあるとしている。

一七　青木祐介「幕末・明治初期の横浜」『伝統都市　一イデア』東京大学出版会、二〇一〇）

一八　横浜浮世絵の全体像などについては以下を参照のこと。『集大成横浜浮世絵』（神奈川県立博物館編、有隣堂、一九七九年十二月）。横田洋一「横浜浮世絵　その虚構と真実」『日本歴史』三六一号、吉川弘文館、一九七八年一月二十五日。『開港一六〇年　横浜浮世絵』神奈川県立歴史博物館、二〇一九年四月二十六日などを参照の事

一九　本図に書かれるあし園作の長唄の内容は以下の通り。

港崎の春を向えし蝶小蝶、千箱の玉を舞遊ぶ、
其羽遣ひの品定め、詠し花の妹脊鳥、めおとの枝と
いゝかわし、御げむと書た結び文、契りハきのふけふハ
また、鶴と亀との寿を、かわすも高き岩亀楼、蝶ハ
翅（つはさ）を袖にしめ、舞てたわれつ、たをやめの。姿たハ風に
まぼろしや、とけてぞ結ぶ糸柳、薫る翅（つばさ）ぞ雲に
きえ、声ハ何虚に聞ゆなり、君ハ千代ませ八千代ませ、
なを色ませや万歳楽、千箱の玉章（たまづさ）奉る、
是ぞ久しき貢なりける
　七十三童あし國戯述

二〇　中尾俊介『横浜開港場と内湾社会』

二一　神谷蘭「横浜浮世絵にみる名所の意識」『浮世絵芸術』一八〇巻、国際浮世絵学会、二〇二〇

【資料一】遊女の手紙

（1）小まちやなかより　上様宛

書添ひ申あけまいらせ候
まつめて（た）やおんきみ様
益々おん運ひ被遊
かす〳〵おんよろこばしく
まつの千年の深緑
若葉の春を重ね
させられはんし御めて度
そんしまいらせ候かつまた
ふる思しハあさからぬ
御ひつき様にあつかり
誠におんうれしく存
あけまへらせ候なをまた
此思し迚も門松の
かわらぬいろ香の御ひへき
をひたすらおんねかへ
あけまへらせ余り者
ふじの絵扇とこゝろ
の要めたゝみをきひられ
御けんにことの葉を
申出けんと残しまいらせ候
あら〳〵めてたく
かしく
小まちや
六月二日　なか■
上様■

（2）つねより　彦七宛

昨ばんハひさ〳〵にて
御出様下され
これ又あつく御れ
ひ申あげまいらせ候
是今ばん御よる
御しまひあそばし
候わゞ何とぞ
御いらせ様下さるよふ
これのみ御願にて申
あげ候しか御むかへ
はかり　あらあら
かしく
つね　　ゟ
彦七様
参る
かへ〳〵壽と
御出様可申と
御まち■申

あげまいらせ候

〔裏面〕
つね
彦七様　■■■
参る

（3）岩亀ことりより　駿河屋彦七宛

〔封筒表〕
するがや迠　がんき
彦七様　御そんじ ゟ

御元衛

〔封筒裏〕
壽　正月廿八日也

（本文）
おまへさんにハあれより
をいでもなくてくうに
な（つ）ていけませんから
ぜしともこんばんにもつご（う）を
してきてごらんなさいよ
たのしんでおりますから
おめにか（かっ）てからおはな
しをしなくてハわかり
ませんからいちんちも
はやくきてごらんなさいよ
まちど（お）し（い）のですから
ごぞんじのと（お）りおきやく
さまもないのですから
ふびんとをも（っ）てきてや（っ）て
こらんなさいよおまいさん
ばかりたよりにして
おりますからかハいそ（う）と
をも（っ）てきてこらんなさいよ
てがミでハわかりませんから
ぜしともハすれづにきて
こらんなさいよきてくれ
てもいでゐありませんよふ
はんじてこらんなさいよ

まつハ
あら〳〵
めでたく
かしく

志こ七様
御元へ　ことり ゟ

（4）かつより　はなおかや彦七宛

〔封筒表〕
するがや
しこ七様　かつ ゟ

御もとへ

〔封筒裏〕

〆　よふじはや〳〵

〔本文〕

一筆さし上申まいらせ候
扨は時かふの
しんき御めん下され候
猶今日ひさ〳〵にて
御めもし様いたし
候ところま事に〳〵
よろこびおり候へば
又じき〳〵御かへり
遊し候へばじつに
〳〵くろふいたし候
猶内かたのてまへも
あ（つ）てたへまで
あつらへおき候ま、
ぜひ〳〵つかへの
ものと御どう〳〵様にて
はやく御こし様
下され度ひとへニ
〳〵御ねかひ
申上まいらせ候まつハ
よふ〳〵のみ

さつと　かしく

はなおかや
　彦七様　ばか
　御もとへ　より

かへす〳〵も
あまり〳〵いそぎ
　かきちらし
ゆへよろしき
　よふに
御よみ下され
ひたすら
御ねかひ上まいらせ候
また〳〵どふそ〳〵
御入らせ様被下
御まち申上まいらせ候

（5）大加より　谷宛

尚々御国元之御様子久々窺不申候得ともくハしく御しらせ可被下候右御両宅様へよろしく御便り可被下候願上候かしく

飛脚便りヲ以一筆
御様子御たつね申上候其後
久々打兼候得どもいよ〳〵
御障りのふ御くらし被遊候やさよふ候得ばこなたにもかわりなく居候まゝ
御あんしなきよふに
御願申上候とふより
どふかぜひ〳〵其地江も
参り度ぞんじ居候得ともなにぶん御ぞんじの通
引続き浪人さわき
大取込殊に当夏中ゟ
江戸用多八分は出府
いたしおりあけくれも
おもへなからいまだに
参り兼はかなき月日
を送りまいらせ候最早
当年の内ハ日詰に相成候ハとてもまいられかね候まゝ
来春は早々に申上度候今
よりたのしみにぞんじまいらせ候
何事も其節ゆる〳〵
御咄申上度御国元ニ
はなにも御かわりもこれなく
候半や御尋申上候御序（ついで）のせつは御両宅様えよろしく
御申伝可被下候こなた
ゟはとふより手紙差
遣し度とぞんじ居候
得ども右之取込かた〳〵
延引相成候ル候處御前様ゟハ一切御序なりとも
御便りこれなくゆい
わざとひかいをりいつか
御便りもこれある御事
と御まち申居候處
いまたになんの御便り
もなく如何之御事と
しんはいいたしなに
か御身上に御かわり等も
有之候事や余り〳〵

ふかくあんじられ
候まゝ此度御たづね
申上候たとい久々打
過参づども一切之
御便り無之とハ余り〳〵
薄状之御こゝろと
実ニ御うらみ申上候
こなたゟハいまたニ
久しく参り兼大井に
〳〵御ぶ沙汰もいたし
居候今後も御身之上ハ
寸志も御あんじ申さゞる
事ハこれなくこゝろ
のたけを御くハしく
御咄し申上度残ねんに
ぞんしまいらせ候外ニ
山々申上度御座候得とも
筆紙につくしかたく
何ごとも僖たしき
御バんのよしと申待
存申候乍去どふぞ〳〵
御身之上は大切借金もせぬ
様ニ何とも〳〵きをつけ
御越年なし被下候やう
ねんじ上まいらせ候此ふみ
とゝき次第早々御返事
御遣し可被下候夫
のみ御まち申居候先ハ
大急き旁々当用計
なに事も御待ち候
目出度かしく
十一月十九日
御ぞんじ
大加ゟ
谷さま
御皆々様へよろしく
御申伝可被下候若又
御入用之品御座候はゞ
かならす〳〵御遠慮
なく御申遣し可被成候
来正月迄ニハせひ〳〵
わさ〳〵なりとも申上度
今よりいのりおりまいらせ候
あしからす〳〵思召
可被下候かしく

（6）花之助より　駿河や彦七宛

〔封筒表〕
駿河や迠
彦七様　花之助
用事

〔封筒裏〕
四月四日

〔本文〕
鳥渡御たのみ申上まいらせ候
御ま衛様事御揃まし
御機けんよろしく
かた〴〵御目出たく
そんじ上まいらせ候扨とや
せんたつ（て）ハ御いらせ
下されすくと御かへり
なされま事に〴〵わたくし事
さんねんにおり猶又
御ま衛様ニせんしつ
御たのみ申た金子わたくし事
ほかにおき處ニもなく
とふぞ〴〵よこし下され猶又
今ばんせひ〴〵
御いらせ下されようニ
くれ〴〵も御ねかい上まいらせ候
まつわあら〴〵
めて度かしく
彦七様
花之助ゟ

（7）岩亀楼文字八尾より　駿河屋彦七宛

〔封筒表〕
駿河や　岩亀楼
彦七様　御そんじゟ
御元衛

〔封筒裏〕
〆　二月四日

〔本文〕
近々舟便りニ松まへ
こんぶとさけのはらこをさし
上まいらせ候間さやうにおほし
召被下へく候かしく

便りニまかせ一筆申上まいらせ候
まつ〴〵御寒さにむかい候へ共
御家内様御機嫌様よく
御いらせ遊しまづ〴〵御目出度
存上まいらせ候さやうに御座候へハ
当四月の手紙たしかに

とゝき申候や遠路の所ニ
御座候へハかた便りにてわかり
かねまいらせ候先達而も申上候
とほり團蔵事三年きも
相しまい候へハさつそく帰り候間
さやうニおほし召被下候
ま事ニ〳〵去年のしやくせん
にてこまり入まいらせ候しかし
なから来年ハおそくも帰り
申候間きくや様へもよろしく
をゝせられ被下候御めんとう
さまなから御あつけ申上候金子
五両の内ゟ去年ことしの
家ちん二両二分きくやへ御渡し
被下候ようひとへニ〳〵願上
参らせ候此度ハ御いそきの便り
ゆへまた〳〵あとゟ申上まいらせ候
はゝかりさまなから御家内様へ
よろしく御傳言ねかい上まいらせ候
何も早々めて度かしく
九月廿二日
書上　文字八尾ゟ
旦那様

（8）神風楼内雲井より　駿河屋彦七宛

〔封筒表〕
するがや迚
彦七様　雲井
御むかひ

〔封筒裏〕
うつき三日
神風楼内

〔本文〕
御むかひかた〳〵　申上まいらせ候
先ニ御機嫌よふ　御いらせ
被遊いかにも〳〵　御目出度
そんし上まいらせ候　さてとや
一昨夜ハせふ〳〵も　御かまひ不申
御氣の得ニそんし候
かつまた明日　はら殊（カ）
江戸へ参り候ニ付　いろ〳〵
御そふたん申上度　御事
御座候まゝせひ〳〵　今晩
御目にかゝり度　そんし
候まゝ、御つこう被遊　御いらせの
よふにこうも〳〵
御願ひ申上まいらせ候　何事も
御迎ひ方々　申付候

あら〳〵
　めて度かしく
追々時こう御大切ニ
御いとひ被下度　かけにも
ねんじまいらせ候
　かしく

（9）不明

鳥渡御迎ひ申上まいらせ候
先ニ御まえ様ニハいつも〳〵
御機嫌様よふ御いらせ被遊
何寄〳〵御めて度そんしまいらせ候
さやうニ候得は先日ハ
折あしく座敷も御ことなく
殊に御気分あしく候やう
あふせられはや〳〵御帰りニ相成
其まゝ今た御めい様ニも逢ひ不申
明かし御すまひ被遊候事と
御あんし申おり候處昨夜ハ
岩亀へ御いらせ被遊候との御事
うけ給とうか今晩ハ
とんたくゆへせひ〳〵
御めい様ニ逢ひ度たのしみに御まち
申上まいらせ候何事も
御むかひのみ申付候
　あら〳〵
　めて度
　かしく
尚々時こう御いとひ
被下度かけにも
ねんしまいらせ候
　かしく

（10）不明

今だふかき御なぢみも
あらん御まへさまへ御ふみ候ハ
あまり〳〵御なれ〳〵しく
とハぞんじ候へ共一寸
御よふすかた〳〵御むかみ申あけまいらせ候
まづ〳〵御まへ様御事ニハ
時こふ御さむさの御さわりも
なく御さや〳〵しく御きげん
よく御入らせあそばし候
まつ〳〵御目出度ぞんじ上まいらせ候
扨とや今だかづならハぬ
わがみへ御入らせ下され
御なちみ下されまことに〳〵
いかよふニも御うれしくそんじ候

やま〳〵御れゐ申し上まいらせ候
猶又あいニくまことに〳〵
おりあしく候てゐつ
御入らせ下され候ても
ざしきもなく候ゆへ
ろく〳〵御かまゑもいたし
もふさづ御かへらせのあと〳〵
ニてもまことに〳〵御きのどく
さまとぞんじどふぞ〳〵
かならづ〳〵あしからづ
おぼしめしなきよふニ
くれ〳〵ニも御ねがへ申しあけまいらせ候
ついてハ今ばんハ一寸
ニてもぜひ〳〵御入らせ下され
候よふニくれ〳〵ニも御ねがへ
申あけまいらせ候まづハ
あら〳〵
かしく
萬事
旦那様
御もとへ

かへす〳〵も時こふも
さたまりかね候まつ
御みのうへ御たゐせつニ
御ゐとい下され
かげ（ニ）もおよばづ
ながら神かけ
ねんじ入まいらせ候

（11）たいより　大のやおかつ宛

〔本文〕

あら玉の御ことふき
いづかたもおなし
御事にいわへおさめ
まいらせ候目出度
かしく

かきそへもふしあけ
まいらせ候まつニや
わかばの春に
御むかい遊ばされ
まん〳〵御目出度
ぞんじ上まいらせ候
かつまたわもじ事も
かわりのうくらし
おりまいらせ■いまゝ
はゞかり様御あんじ

くださるまじく候
猶またさくねん
おんたのみのかみ
かけおくりしんじ
候らへどもとゞき
申さず候やら
今もつておとづれ
ござなくやま〳〵
あんじくら（し）折まいらせ候
なにかめづらしき
ものとたづね候らへども
何もめづらしき
しなござなく
たゞ御ねんしの
しるしまでニおさめ
下され度御ねがへ
申上まいらせ候猶此ふみ
とゞきしだへ早々
御返事下され度
それのミ待あかし
まいらせ候
めでたく
かしく
二月四日

大のや
おかつ殿　たいら
御もとへ

かへす〳〵も
いろ〳〵内あけ候事
これあり候らへども
わもじ事ま事ニ
いそがわしく候まゝ
あとのたよりとやめ申上候
すへふでながら旦那
様へよろしく御つたへ
下され

【資料二】遊女直段附并歩合割取究之事

（1）

御国人客之分

一　揚屋座敷代

　　御壱人前　　金弐朱

一　遊女揚代

　　上　　昼夜　金三歩

　　　　夜中斗金壱歩弐朱

　　中　　〃　　金弐歩

　　　　前同断半直段

　　下　　〃　　金壱歩

　　　　前同断

　　揚新造　　金弐朱

（2）

右揚代之内

　　五分　　会所納

　　壱割五分　　揚屋賄料

但上中㊦遊女之分壱割増

一　引残

七割上中遊女抱主江相払候事

八割下ノ遊女抱主江相払候事

但茶屋送り客之分買物かすり不残

遊女屋江茶屋江差遣し候事

遊女屋江茶屋送り之分は買物かすり

不残茶屋江差遣し候事

異人客揚屋行之分

一　揚屋座敷代酒食賄料

　　二階座敷　御壱人前　　金弐歩

　　下坐敷　　御壱人前　　金壱歩

　　子供手踊舞弐番続　金壱両弐歩

一　遊女揚代

　　上　　金三両

　　　　夜斗壱両弐分

　　中　　金壱両弐歩

　　　　前同断三歩

　　局見世　　金弐朱此分合無之

（3）

　　但泊之分金三歩

局見世異揚代金之内壱割五分会所江

相納五分揚屋江差出し候事

交見世右遊女揚代之内

　　壱割五分　　会所納

　　弐割五分　　揚屋賄料

引残而六割遊女抱主江相払候事

一　商館行
　上　遊女　一夜泊金二両也
　　月仕切金弐拾五両也
　中　遊女　一夜泊金壱両弐分
　　月仕切金弐拾両

右歩合
　一　夜泊　壱割五分　会所納
　　壱割五分　揚屋賄料

　月仕切　壱割五分　会所納
　　五　分　揚屋賄料

一　裏祝儀
　上　之分　金三歩
　中　之分　金弐歩

右見世馴染金之儀は揚屋若キ者仲居中江差遣候事

一　惣花　金三両

（4）

一　呼出し花　金弐両
　但茶屋附之分付金壱割差遣し候事

一　三会目床花馴染金
　上　之分　金弐両也
　中　之分　金壱両也

右之内
　弐割　揚屋
　　但茶屋付之分半減茶屋江差遣し候事

一　男女芸者座敷代
　昼夜仕舞壱人ニ付
　　金壱両弐歩

線香壱本
　同金　弐朱

右座鋪料代金弐朱之割合
　一　銀五分　会所納
　一　銀七分五厘　見　番
　一　銀弐匁五分　芸者当人渡し
　一　銀三匁七分五厘　揚屋弐ツ割
　　茶屋

一　花祝儀貰物
　異人ゟ金銀并品物等貰請候節は

（5）

一　早速会所江相届御差図受可申候事

一　局見世之分
　右は毎朝取集メ会所江相納可申事

一　遊女抱方之儀元方相糺都而念入手違無之様致し取極候節は証文認メ方等御差図請可申并芸者心得方振合等萬端江申渡し之趣逸々相背申間鋪候事

遊女揚代歩合玉銭取極左之通

昼夜

上　金三歩

御仕舞金壱歩弐朱

御国人之分　　同

一　遊女揚代　中　金弐歩

前同断金壱歩

同

下　金壱歩

前同断金弐朱

揚新造　金弐朱也

此歩合

金弐朱ニ付

銭三拾文　会所納

（6）

但茶屋送り客之買物得分并揚代金弐朱ニ付

引手銭四拾八文ツヽ茶屋差出可申候事

異人客揚屋送り之分　壱人ニ付

一　揚屋座鋪代　二階座鋪金弐歩

同断

下座敷金壱歩

花代

子供手踊舞弐番続　金壱両弐分

一　遊女揚代　壱人ニ付　昼夜

金壱両弐分

御仕舞金三分

此歩割

銀弐拾五匁弐分

但御仕舞は銀拾弐匁六分

町並遊女屋支那人　昼夜

局遊女屋異人支那人　泊客　金壱両弐分

御仕舞金三歩

但異人支那人遊女屋揚代之儀（カ）最初直段夫々取極

書上置候通元直段相記し置候得共異人之義ニ付自然

値段甲乙茂有之候へ共歩割は取極通り会所江差出

可申尤格別直下ヶ売崩し候儀致間鋪候事

此分割

銀三匁七分五厘　会所納

（7）

商館行遊女　壱人　壱ヶ月

金弐拾両

但右同断

此分割

金弐両弐朱　会所納

壱夜泊り

一　右同断　遊女　壱人　金壱両弐歩
　　右同断
　　此分割
　　金壱歩　　会所納
一　裏祝儀　上　金三歩
　　中　金弐歩
　　但弐会目見世馴染金は遊女屋若者仲居中
　　可差出候積り
一　惣花　　金三両
一　呼出し花　　金弐両
　　但茶屋附之分附金として内壱割茶屋江
　　可差出候事
一　三会目遊女馴染金　上　金弐両弐歩
　　中　金弐両也
　　但茶屋附之分は前同断且品物等貰請候節
　　夫々見斗相當ニ差遣出し可申事
一　男女芸者座鋪代　　昼夜仕舞
　　金壱両弐分
　　壱人線香壱本
　　金弐朱
　　右坐鋪代金弐歩之割合
一　銀四分五厘　　会所納

（8）

一　銀六分七厘五毛　見番渡
一　銀三匁　　当人渡
一　銀三匁三分七厘五毛　遊女屋徳分
　　但茶屋送り之分は遊女屋茶屋二タ（カ）割候事
一　右同断花祝儀貰物
　　客ゟ金銀并品物等貰請候節は会所江相届
　　附金として金弐朱ニ付銭百六拾文ツヽ割合ヲ以
　　遊女屋江差出し茶屋附之分は茶屋差出し可申事
一　局遊女屋　　見世壱ツニ付
　　座鋪七拾弐文ツヽ
　　右之通取極り候上は遊女直段甲乙并□銀
　　相場相違等ニ不抱書面之割合之通会所江
　　可差出候事

【資料三】港崎町大火の節娼妓立退の件

一、松金屋幸兵衛
　吉田町清正前仮宅江立退
　抱遊女七人
　　右は不残遊女（カ）共
　　立退場ニ罷居候

一、新谷上屋久兵衛
　仲の町谷上屋八十八ノ方江
　立退抱遊女九人
　右は不残立退場
　罷在

一、小松屋松五郎
　若松町松屋藤助方江
　立退
　　抱遊女八人
　　内壱人病院入
　　残七人之内
　　田かし満
　　若福
　　〆弐人
　　逃去

一、新之丞屋万助
　尾上町丁子湯方江立退
　抱遊女拾人
　　内壱人病院
　　八人立退罷出
　　外ニ壱人逃去

一、丸形屋重太郎
　相生町三丁目源四郎支配
　隠宅江立退
安藤　抱遊女拾五人
新吉　右は不残立退場ニ
　罷在候

一、おし満屋惣右衛門
　尾上町弐丁目若山九兵衛方江
　方江立退
　　抱遊女拾四人
　　内五人行衛［不脱カ］知

一、岩佐屋繁蔵
　吉田福富町弐丁目

庄吉店江立退
抱七人
不残立退帰罷出候

一、富本屋亀吉
太田町弐丁目油屋弥助
方江立退
遊女不残立退帰罷出

一、川泉屋久右衛門
新濱町井上周治郎
遊女不残立退帰
罷出

一、新川泉屋　同断
同断
五人

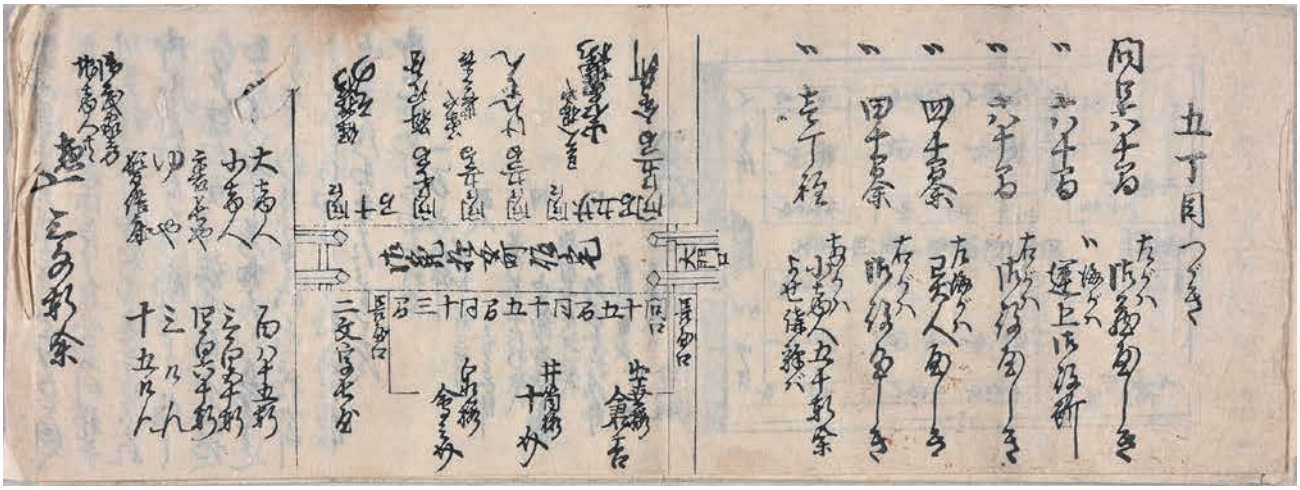
【資料四】遊女奉公

吉田町
　興吉店
人主勝蔵
駒形埋地
　政次郎店
受人儀兵衛
江戸飯田町
　中坂下
彦兵衛店
実母
　かね
奉公人　さく事
慶應三卯年　松尾
九月廿八日ゟ　卯廿三才
壱年ニ
身代金
　六拾両也
側宅五ヶ年
　壱ヶ月

【裏】
まつかねや
　幸兵衛

本稿携載の資料一～四の翻刻については、当館仲泉剛（学芸員）、小林紀子（主任学芸員）、石崎康子（元主任学芸員）及び横浜開港資料館神谷大介氏（調査研究員）に多大なご協力を得た。

【図一】「横浜開港地割ノ図」安政６年（1860）３月、横浜市中央図書館蔵



【図三】「安政六年未附并諸商人軒数明細」安政６年（1860）、横浜開港資料館蔵

【図二】「岩亀楼主佐藤佐吉肖像」万延元（1861）年～慶応２年（1865）頃、横浜市中央図書館蔵

【図四】五雲亭貞秀「神奈川横浜華郭之光景」安政７年（1860）２月、大判３枚続、横浜市歴史博物館蔵

【図五】五雲亭貞秀「神奈川横浜新湊港崎町遊廓花盛之図真景」万延元年（1860）閏３月、大判３枚続、横浜開港資料館蔵

【図六】五雲亭貞秀「再改横浜風景」文久元年（1861）2・6 月、大判 6 枚続、横浜市歴史博物館

【図七】歌川豊国（三代）・国時（二代）「源氏君花街遊覧 岩亀楼」万延元年（1860）5 月、大判 3 枚続、横浜開港資料館蔵

【図八】歌川国明（二代）「横浜五十鈴楼之図」万延元年（1860）5 月、大判 3 枚続、横浜開港資料館蔵

【図九】歌川広重（二代）「横浜岩亀楼上」万延元年（1860）6 月、大判 3 枚続、横浜開港資料館蔵

【図十】歌川芳虎「画稿 外国人遊興 横浜拳」 文久元年（1861）頃、紙本墨画一部着色、横浜開港資料館

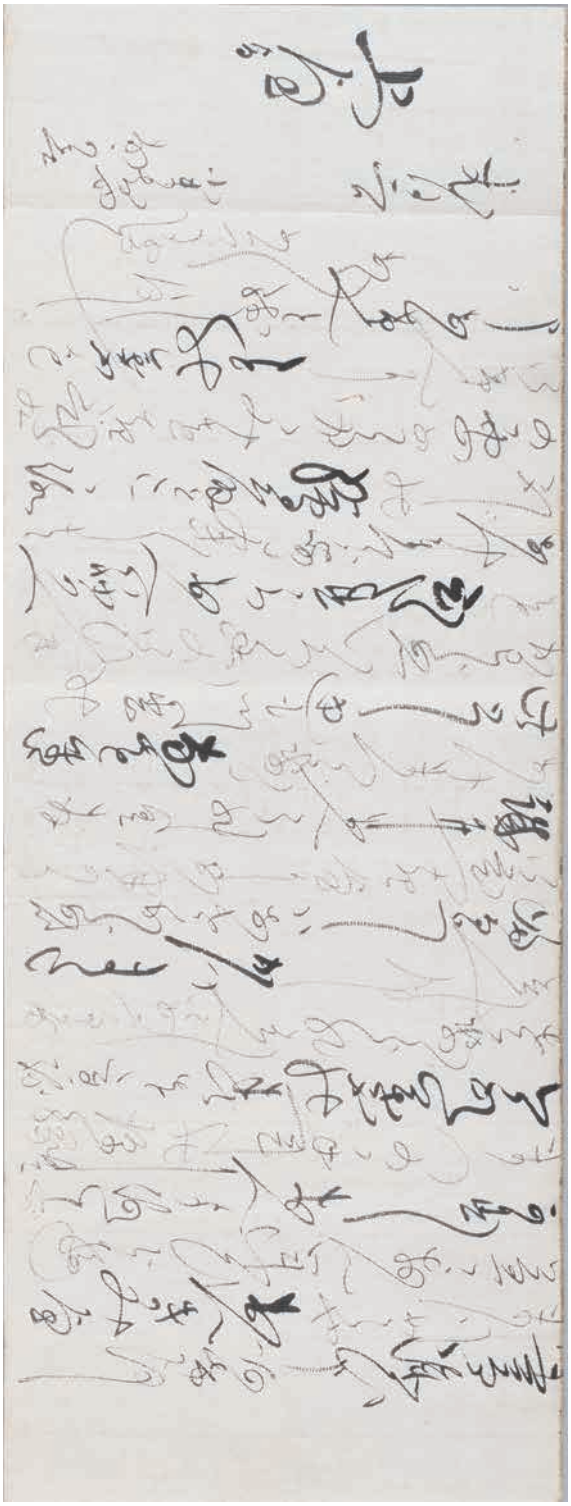
【図十一】歌川芳虎「画稿 外国人遊興之図 裸踊り」 文久元年（1861）頃、紙本墨画一部着色、横浜開港資料館

【図十二】五雲亭貞秀「横浜本町港崎町振分双六」万延元年（1860）10 月、大判 3 枚続、横浜開港資料館蔵

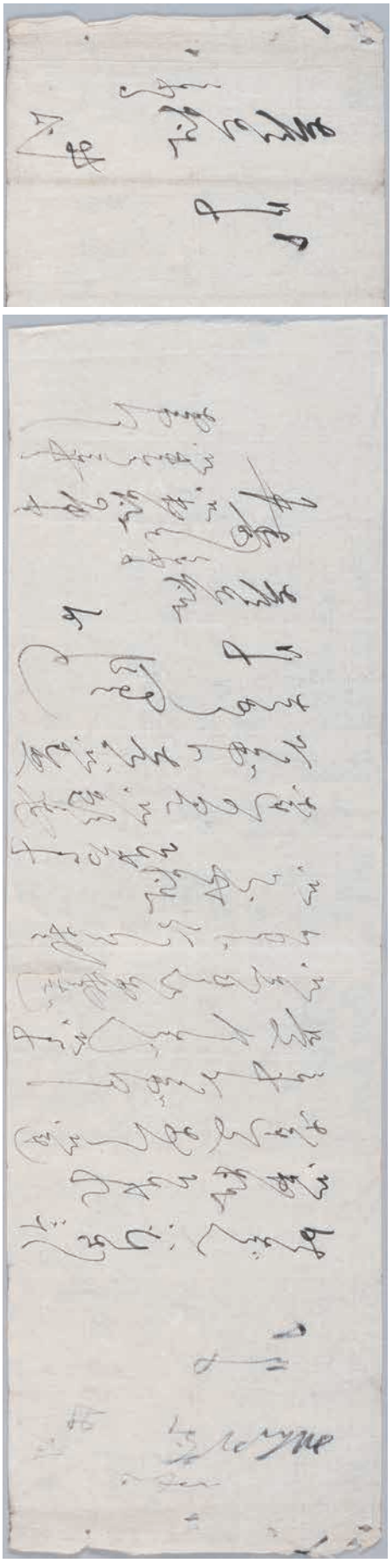
【図十三】歌川広重（二代）「横浜岩亀楼」万延元年（1860）9 月、大判 3 枚続、横浜市中央図書館

【図十四】歌川国盛（二代）・あし園戯述「港崎廓岩亀楼 配手拭袋」万延年間（1860 ～ 61）頃、摺物、横浜開港資料館

【図十五】歌川芳員「横浜廓港崎町 岩亀楼一覧」万延元年～慶応２年（1860 ～ 66）頃、摺物、横浜開港資料館

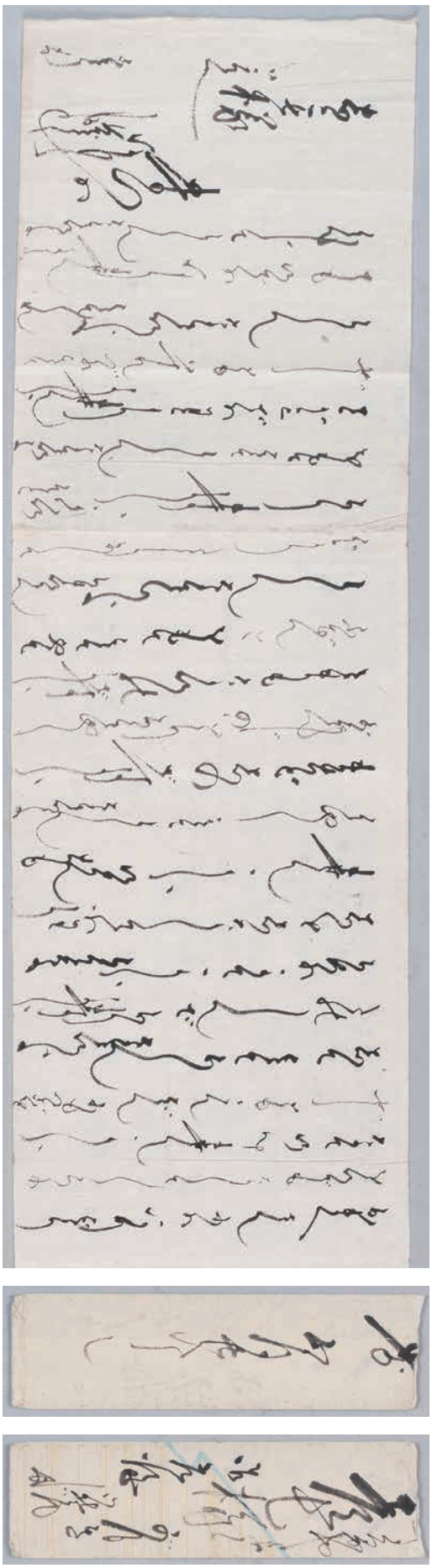


（1）「小町屋なかより　上様宛」



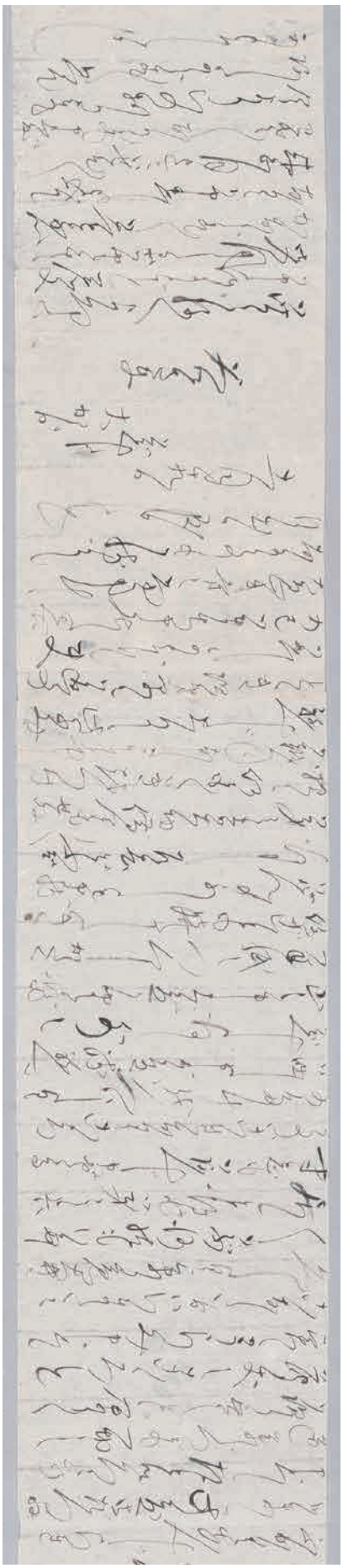
（2）「つねより　彦七宛」

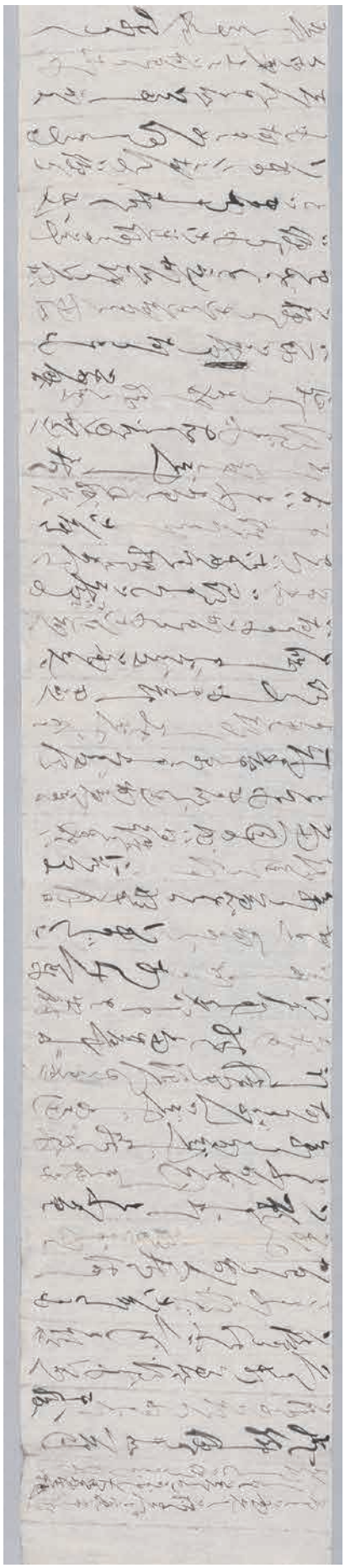
【図十六】「遊女の手紙」横浜開港資料館蔵



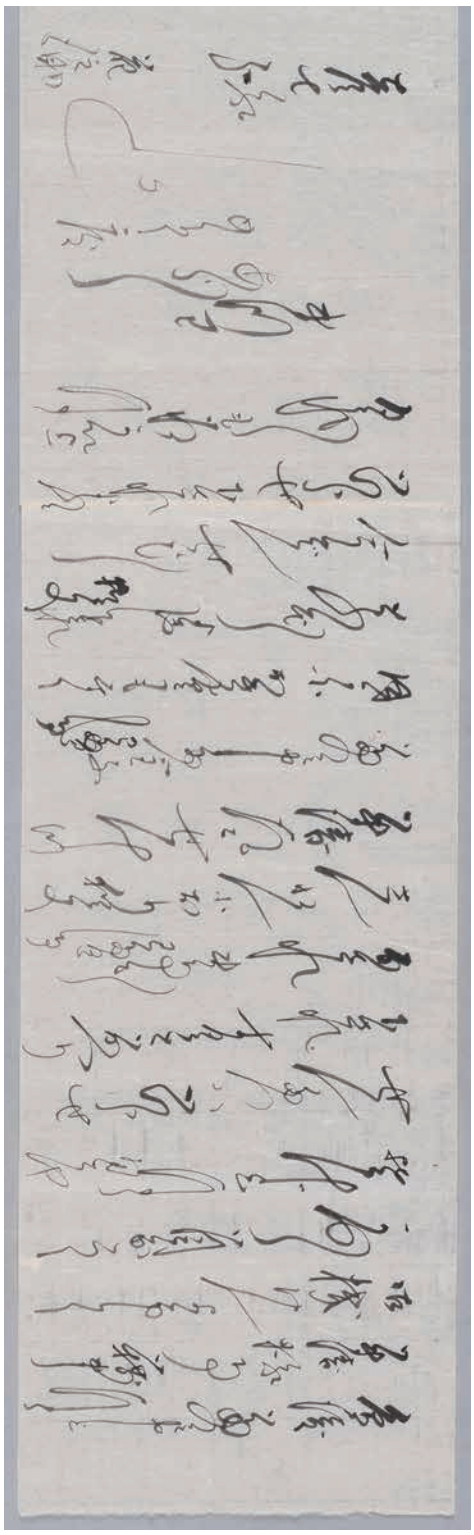
（3）「岩亀ことより　駿河屋彦七宛」

（4）「かつより　はなおか屋彦七宛」

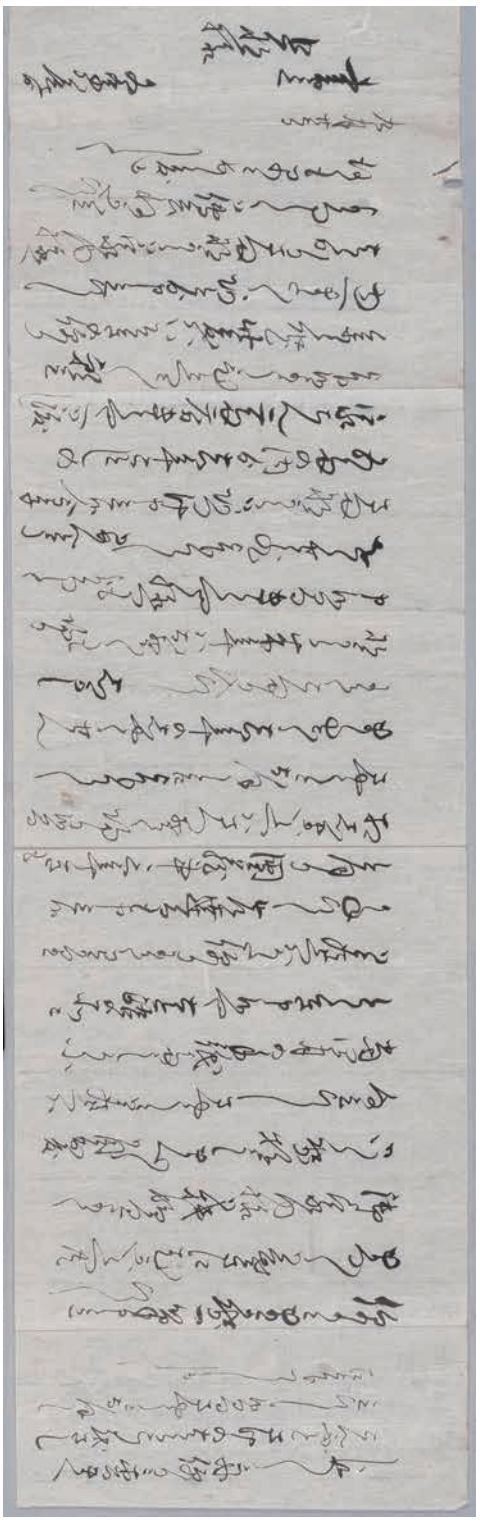




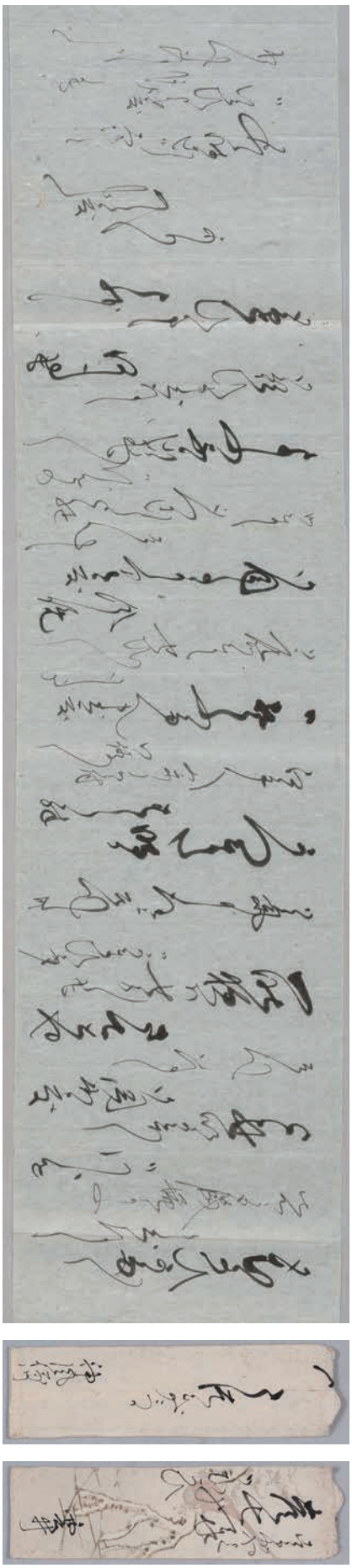
（5）「大加より　谷宛」



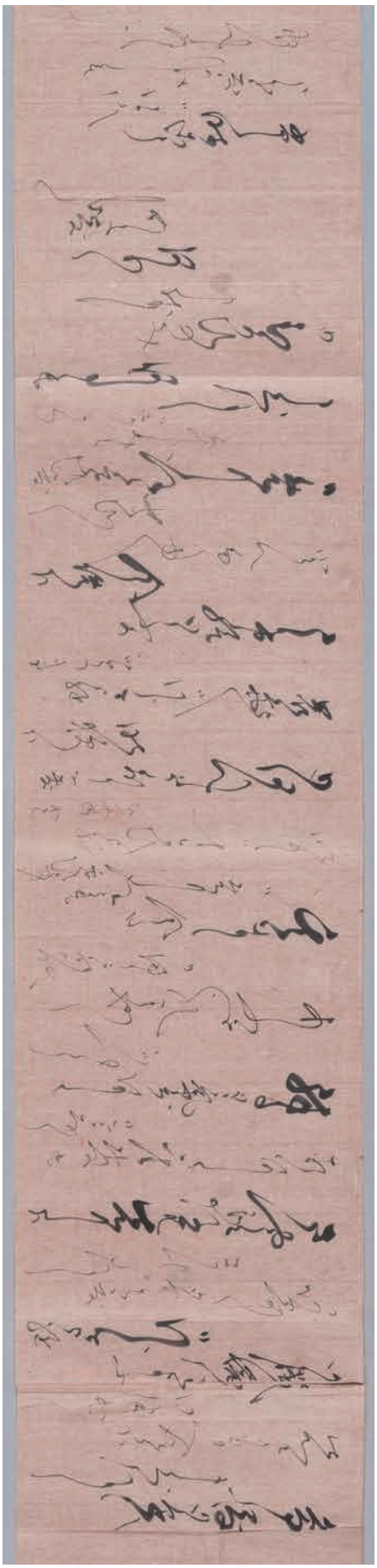
（6）「花之助より　駿河屋彦七宛」



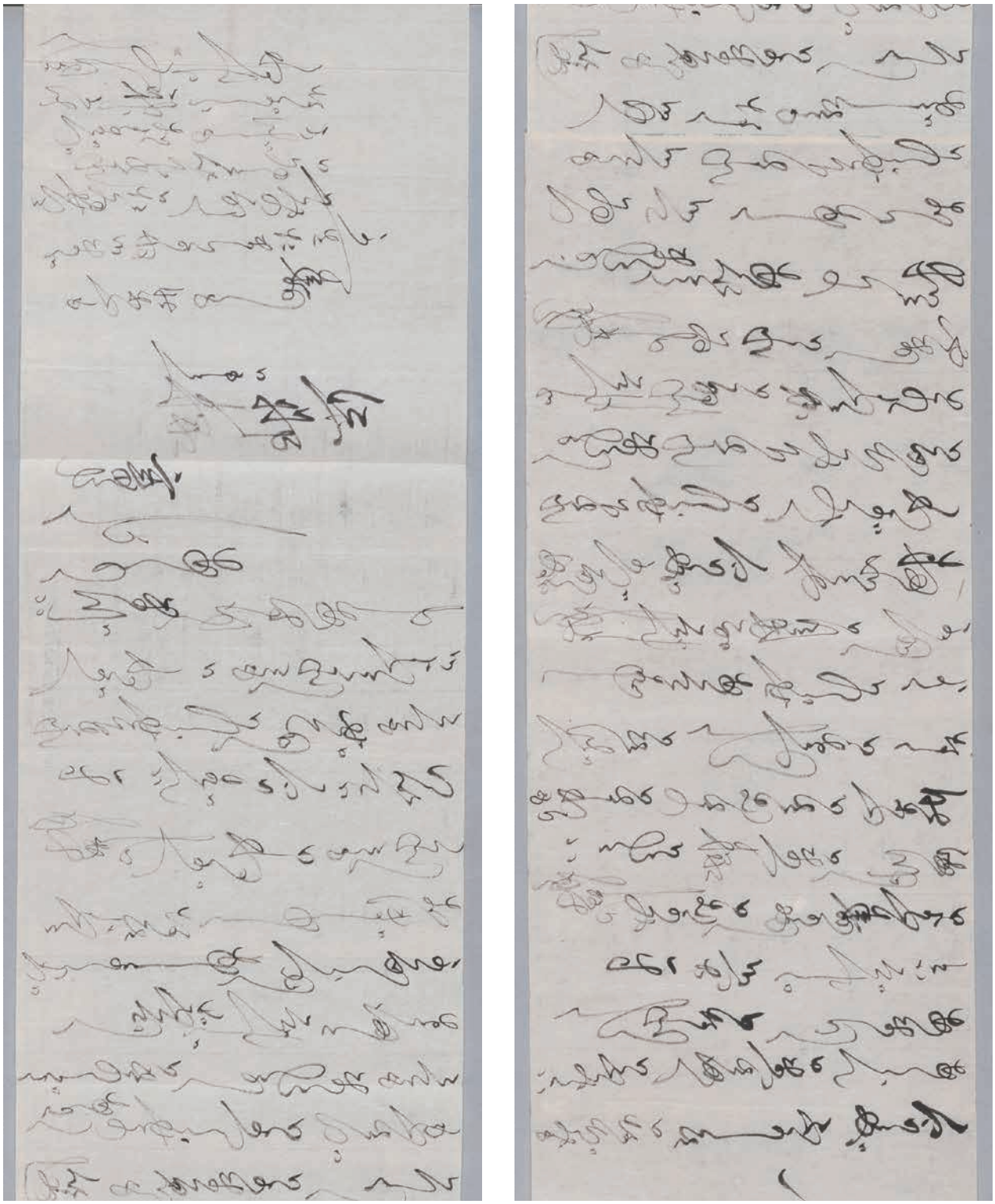
（7）「岩亀楼文字八尾より　駿河屋彦七宛」



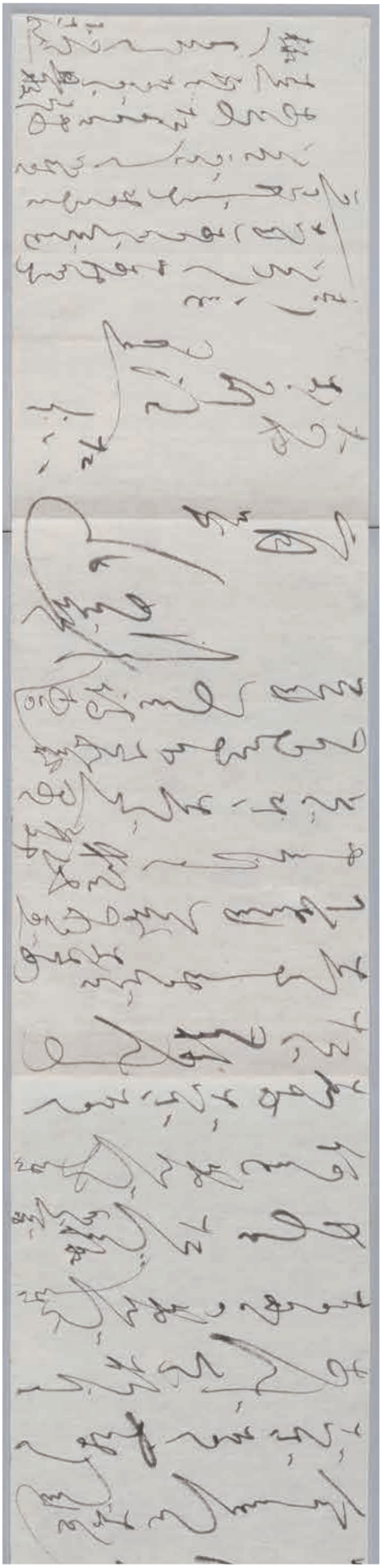
（8）「神風楼内雲井より　駿河屋彦七宛」

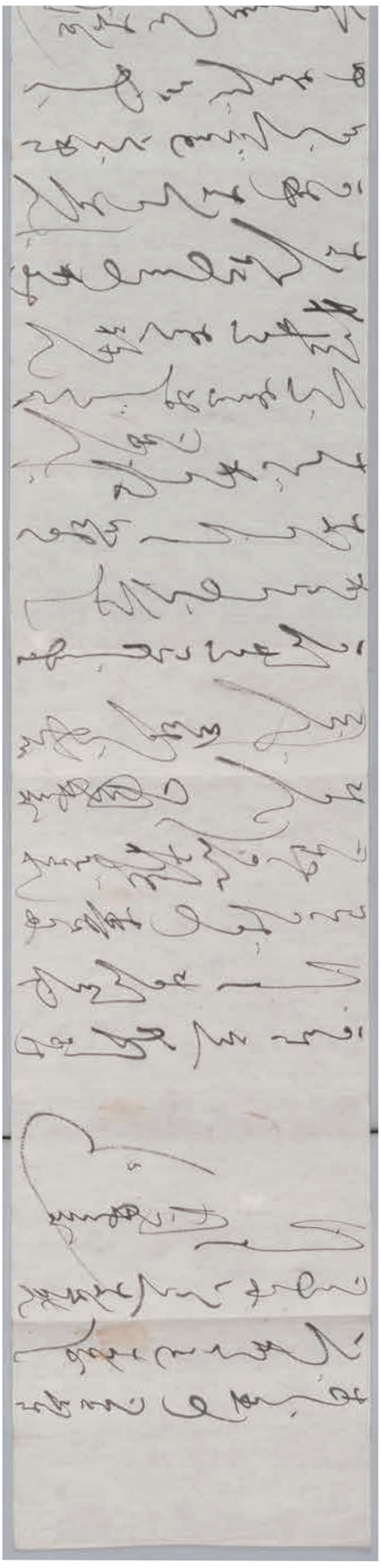


（9）不明

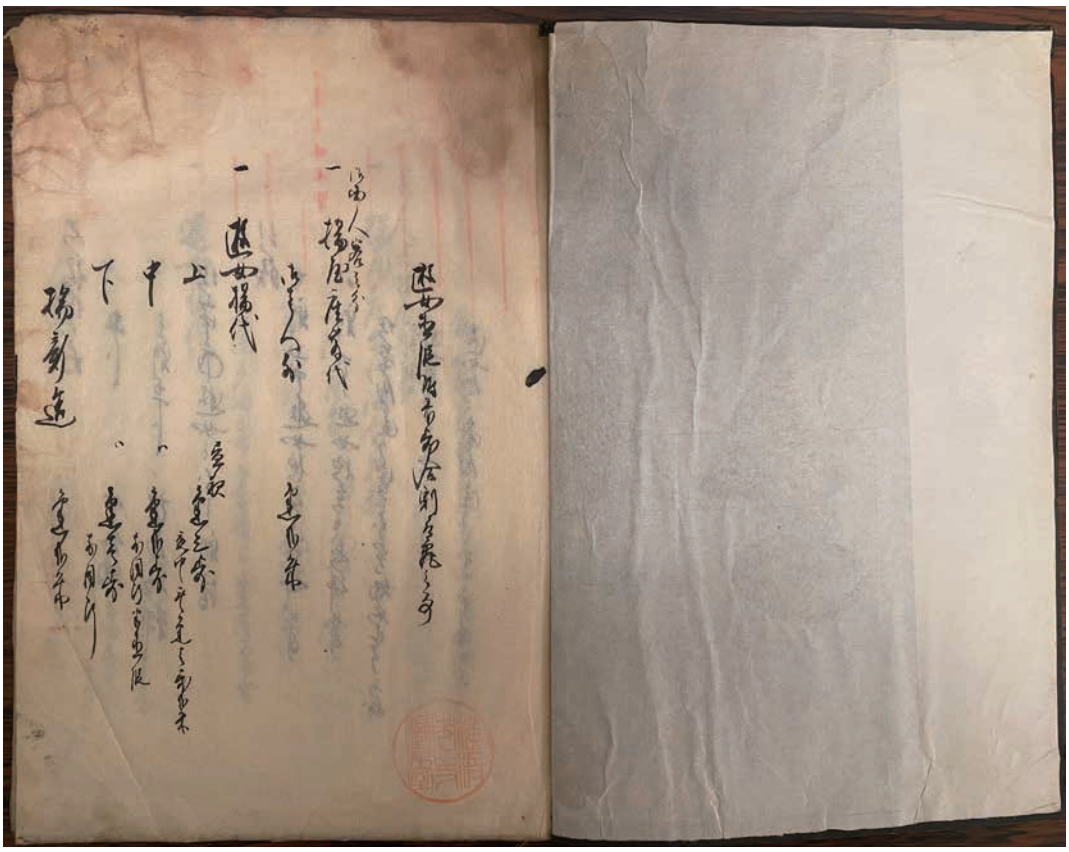


（10）不明

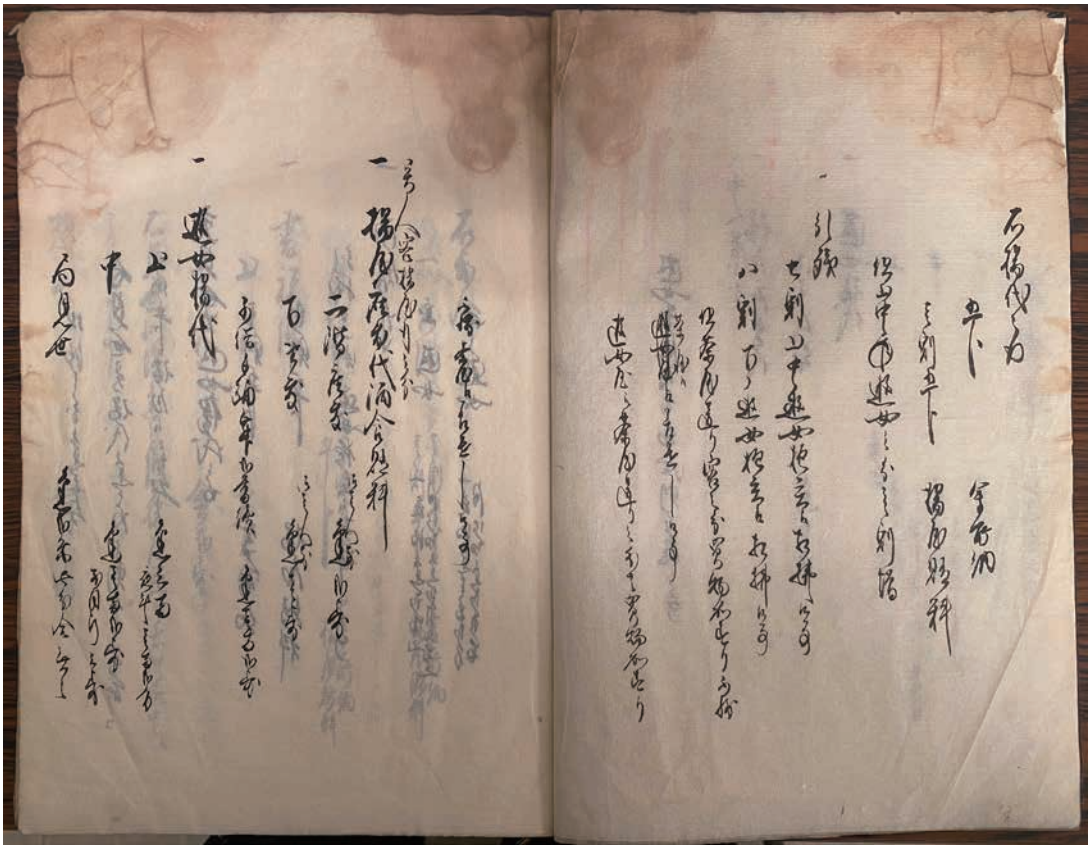




（11）「たいより　大の屋おかつ宛」

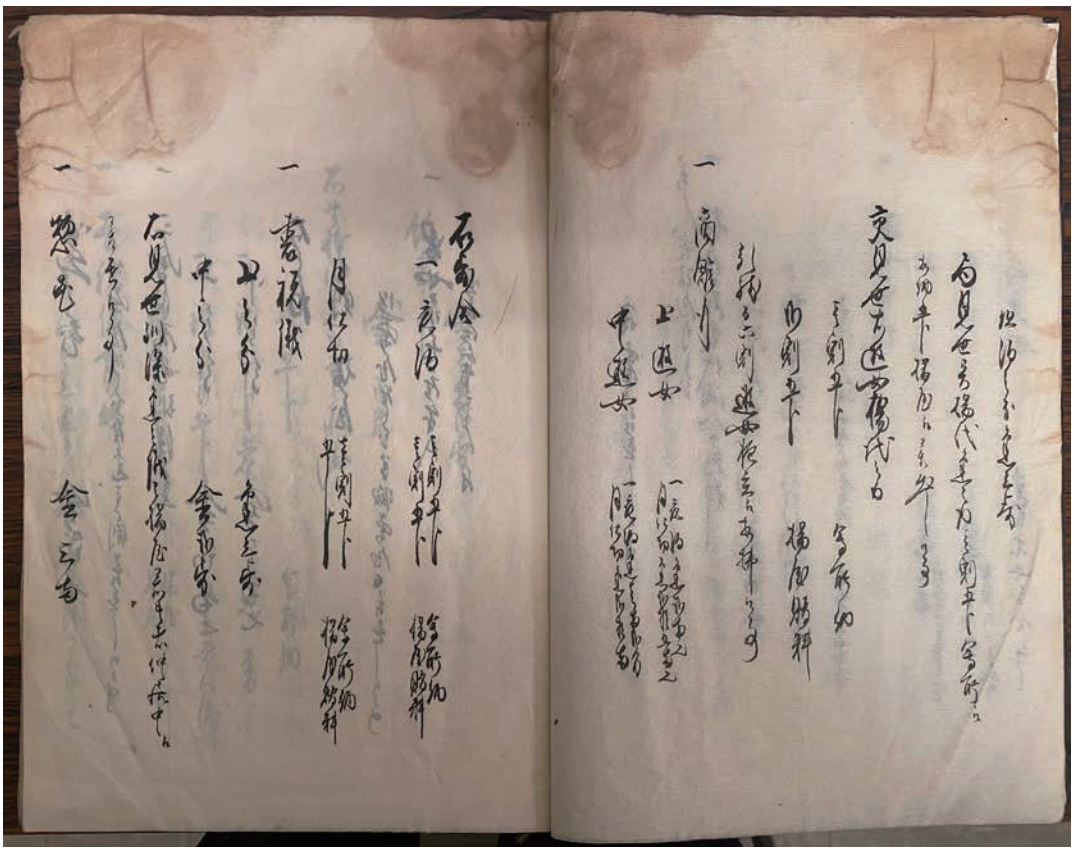


（1）

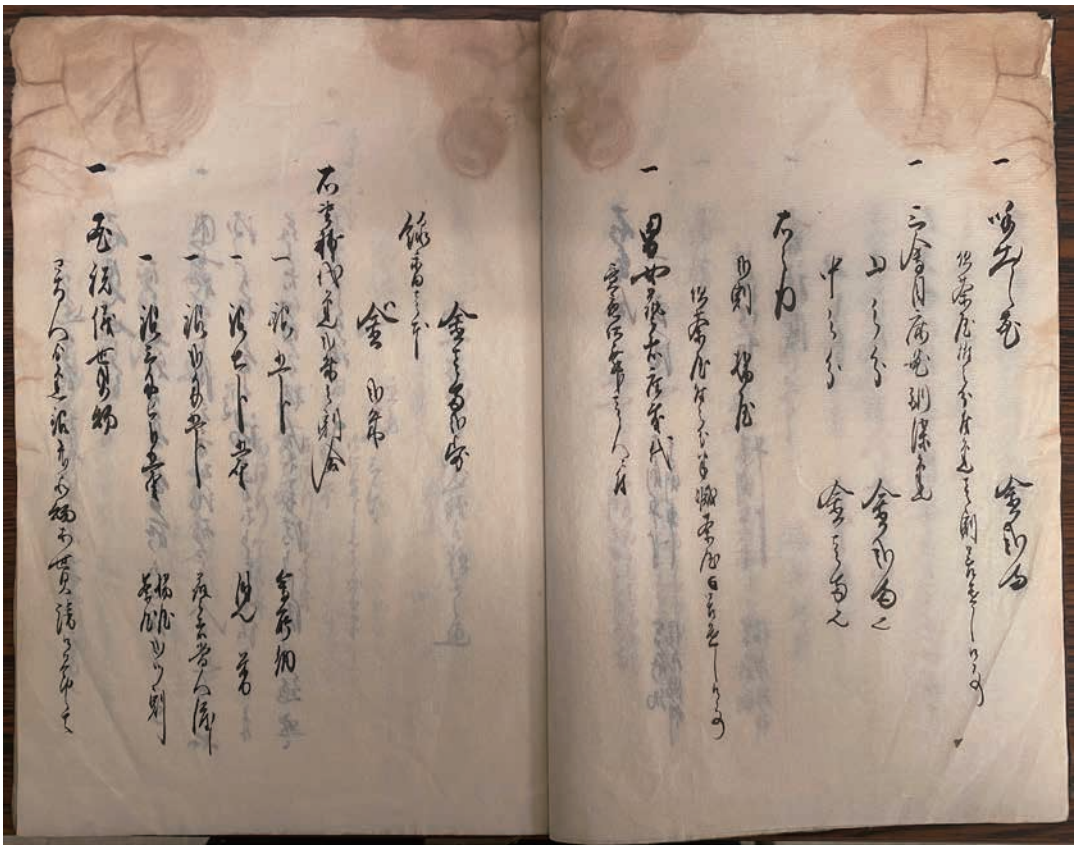


（2）

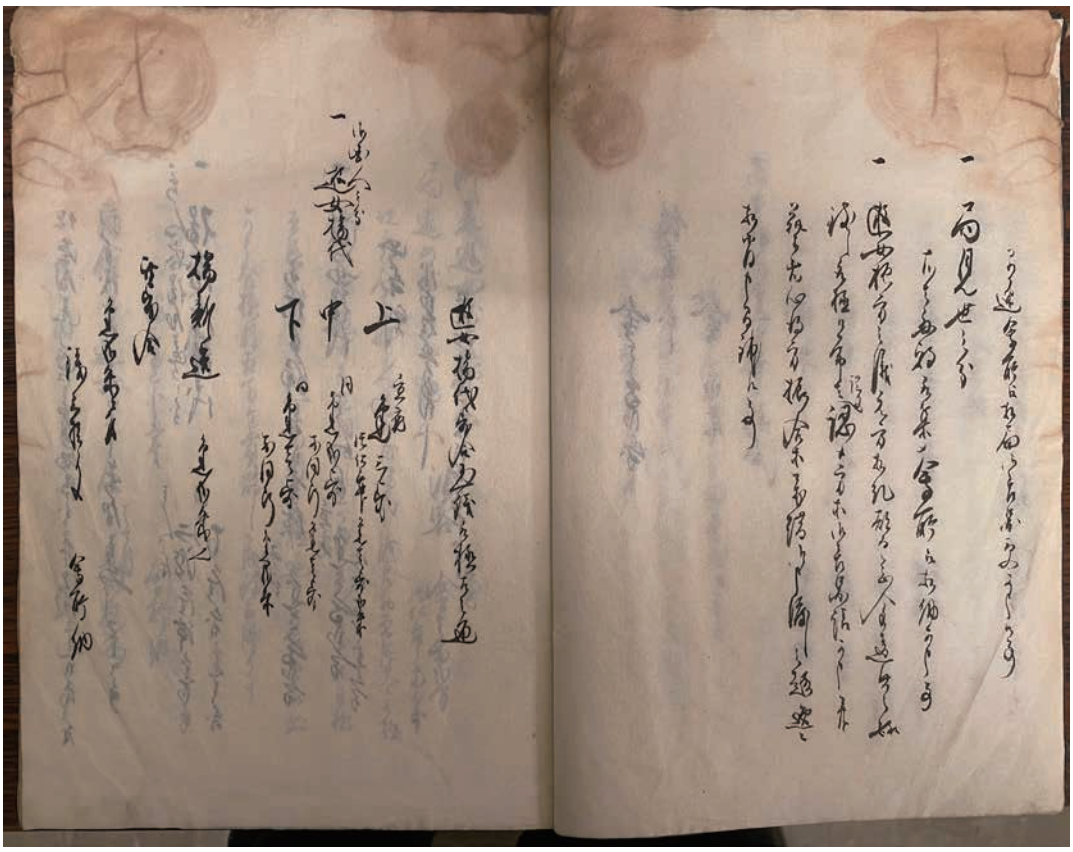
【図十七】「遊女直段附并歩合割取究之事（写本）」横浜開港資料館



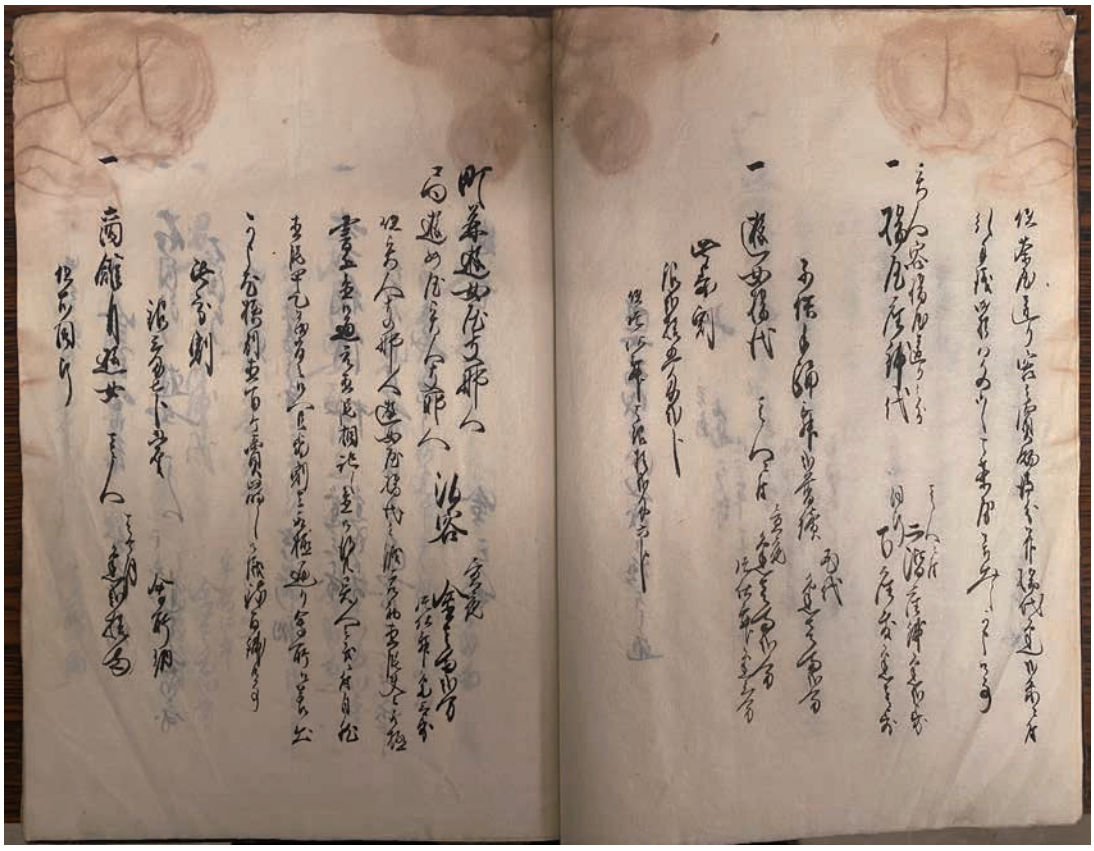
（3）



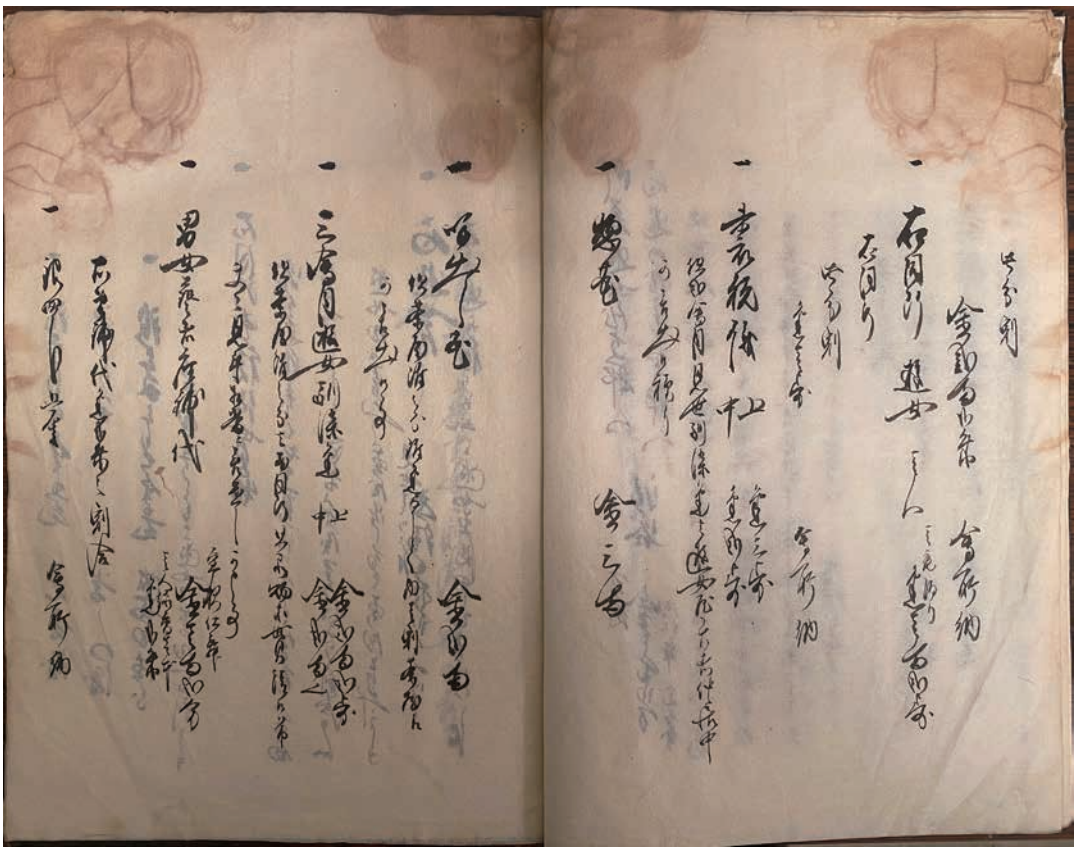
（4）



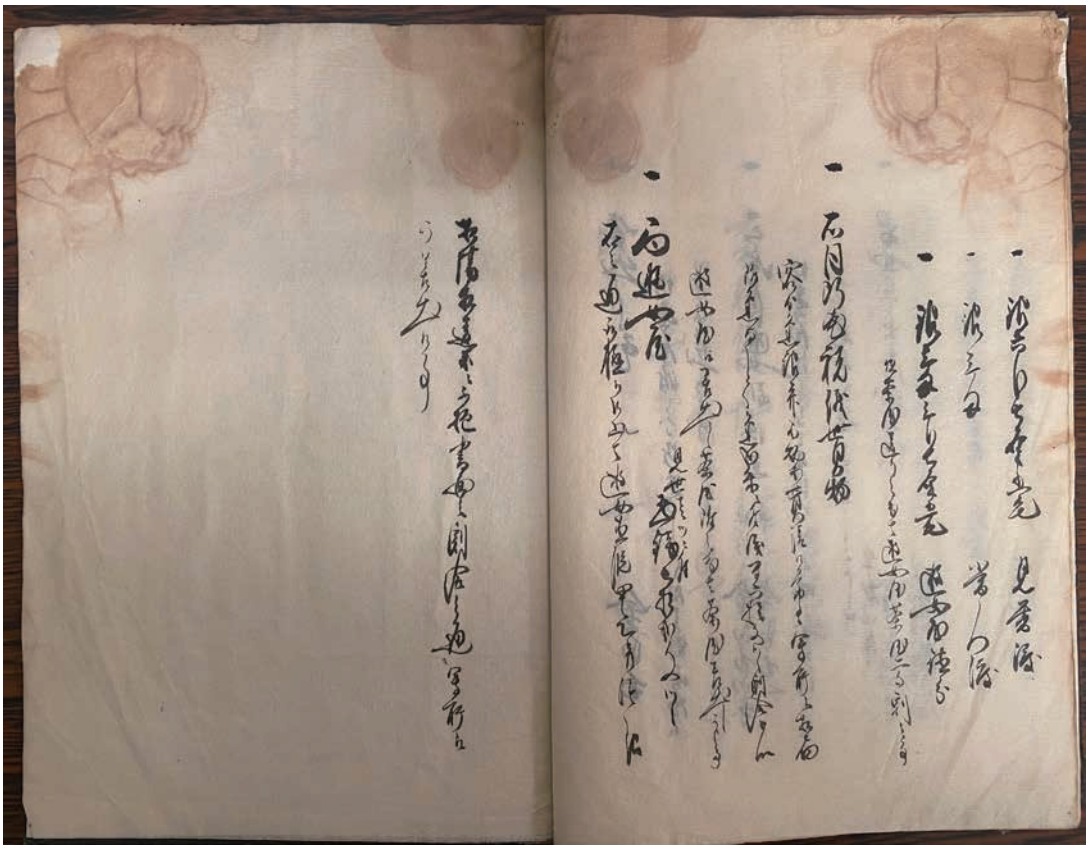
（5）



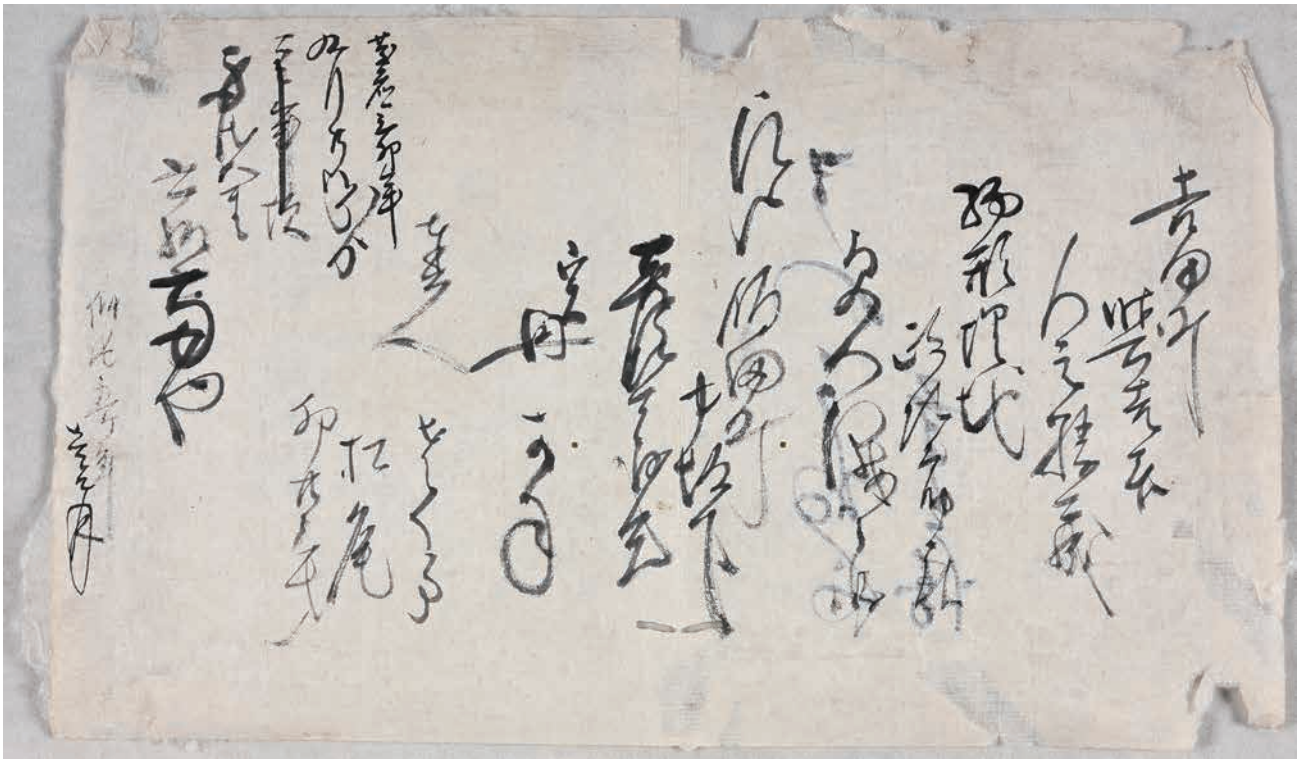
（6）



（7）



（8）



【図十八】「覚 遊女奉公」横浜開港資料館

【図十九】「港崎町大火の節娼妓立退の件」横浜開港資料館

・本表は現在知られている横浜浮世絵のうち本稿に関連する港崎遊廓を主題とする一覧である。
・本表に掲載する横浜の遊廓関連浮世絵は港崎遊廓が消失する慶應２年までに発行されたもののうち本稿に関連するものを掲載しているため横浜の遊廓関連浮世絵のすべてを掲載するものではない。
・一覧には画像を掲載するがすべてではない。掲載画像は横浜市歴史博物館および横浜開港資料館、横浜市中央図書館のものである。
・表は画像に続き作品名、作者、版元、改印、出版年、形状、所蔵先の順で記、発行時期の早い順番に掲載した。

no.		作品名	作者	版元	改印	出版年	形状	所蔵先
1		神名川横浜華郭之光景	五雲亭貞秀	山口屋藤兵衛	申二改	安政７年(1860)	大判錦絵３枚続	横浜市歴史博物館
2		横浜神崎ヨリ吉田橋野毛浦切通シヲ見ル并ニ右之方弁天乃森神奈川宿ヲ見渡ス風景	五雲亭貞秀	辻岡屋文助	申三改	万延元年(1860)	大判錦絵	横浜開港資料館
3		横浜港崎町郭中之正写	歌川芳員	丸屋甚八	申三改	万延元年(1860)	大判錦絵３枚続	横浜開港資料館
4		東海道名所之内横浜風景	五雲亭貞秀	西村屋与八	申三改	万延元年(1860)	大判錦絵８枚続	横浜市歴史博物館
5		神名川横浜之風景	歌川芳年、年麿	遠州屋彦兵衛	申閏三改	万延元年(1860)	大判錦絵３枚続	横浜開港資料館
6		神奈川横浜新湊港崎町遊廓花盛之図真景	五雲亭貞秀	藤岡屋慶次郎	申閏三改	万延元年(1860)	大判錦絵３枚続	横浜開港資料館
7		横浜港崎町大門橋真景	五雲亭貞秀	藤岡屋慶次郎	申閏三改	万延元年(1860)	大判錦絵３枚続	横浜市歴史博物館
8		横浜本町景港崎街新廓	五雲亭貞秀	山口屋藤兵衛	申閏三改	万延元年(1860)	大判錦絵３枚続	横浜市歴史博物館

no.		作品名	作者	版元	改印	出版年	形状	所蔵先
9		諸国名所百景 武州横浜岩亀楼	歌川広重(二代)	魚屋栄吉	申閏三改	万延元年(1860)	大判錦絵	横浜市歴史博物館
10		神奈川横浜一覧	歌川広重(二代)	金鱗堂	申閏三改	万延元年(1860)	大判錦絵3枚続	横浜開港資料館
11		横浜港崎廓岩亀楼異人遊興座敷之図	歌川芳員	丸屋甚八	申閏三改	万延元年(1860)	大判錦絵3枚続の内2枚	横浜開港資料館
12		横浜岩亀見込之図	歌川広重(二代)	大黒屋金治郎	申四改	万延元年(1860)	大判錦絵3枚続	横浜開港資料館
13		横浜岩亀楼上	歌川広重(二代)	金鱗堂	申四改	万延元年(1860)	大判錦絵3枚続	横浜開港資料館
14		横浜廓之図	歌川国芳	和泉屋市兵衛	申四改	万延元年(1860)	大判錦絵3枚続	横浜開港資料館
15		横浜本町并ニ港崎町細見全図	五雲亭貞秀	山本平吉	申四改	万延元年(1860)	大判錦絵3枚続	横浜開港資料館
16		横浜廓中之図	歌川国周	山田屋庄次郎	申四改	万延元年(1860)	大判錦絵3枚続	横浜開港資料館

no.		作品名	作者	版元	改印	出版年	形状	所蔵先
17		横浜五十鈴楼之図	歌川国明（二代）	山口屋藤兵衛	申五改	万延元年（1860）	大判錦絵3枚続	横浜開港資料館
18		源氏君花街遊覧 岩亀楼	歌川豊国（三代），歌川国時（二代）	森屋治兵衛	申五改	万延元年（1860）	大判錦絵3枚続	横浜開港資料館
19		横浜港崎町楼上之図 岩亀楼繁昌之図	歌川広重（二代）	上州屋金蔵	申五改	万延元年（1860）	大判錦絵3枚続	横浜開港資料館
20		神奈川横浜二十八景之内 ①此所ハ本町一丁目ヨリ本町二丁目同うら通海岸町二丁目磯に至る神奈川明神前ヨリ渡船の上場を見渡之風景ナリ／港崎町会所の図　②横浜本町三丁目ヨリ四丁目迄うら通海岸町三丁目四丁目共ニ見渡ス其磯ニ至りて波涛打を一覧の景色なり／岩亀楼　③西の方波止場ヨリ真直の通りハ港崎町ゑもん坂ニ出るを見るナリ并海岸町御舩蔵本町五丁目大通り商家の有様を見渡すに至る／岩亀楼のつゞき　④／五十鈴楼　⑤東波止場ハ買取たる荷物を小舩ニ積入本舩にうつす之有様なり西波止場ハ江戸ヨリ積おくるの荷物水揚の所ニて此東ハ運上屋ヨリ下りたるをつミ入る場所ナリ／大門出口の柳　⑥横浜本村ヨリ杉山薬師道并ニ本牧十二天道の辻横浜新田等を見渡す之景大門前町港崎橋之景	五雲亭貞秀	糸屋庄兵衛	申五改	万延元年（1860）	大判錦絵14枚続の内6枚	横浜開港資料館
21		横浜細見記	歌川芳員 画 梅亭魚父序	丸屋甚八	申五改	万延元年	版本墨摺1冊	横浜開港資料館
22		神奈川横浜新湊港崎町遊女屋之風景	歌川芳虎	山田屋庄次郎	申六改	万延元年（1860）	大判錦絵3枚続	・川崎・砂金の里資料館 ・神奈川県立歴史博物館
23		神奈川横浜港案内図絵	五雲亭貞秀	大黒屋平吉	申七改	万延元年（1860）	大判錦絵3枚続	横浜開港資料館
24		横浜大湊細見之図	五雲亭貞秀	辻岡屋文助	申六改	万延元年（1860）	大判錦絵3枚続2段	横浜開港資料館

no.		作品名	作者	版元	改印	出版年	形状	所蔵先
25		御開港横浜之図	歌川芳員	新栄堂 東屋新吉		万延元年 (1860)頃	横大判錦絵２枚続２段	横浜開港資料館
26		横浜岩亀楼	歌川広重(二代)	藤岡屋慶次郎	申九改	万延元年 (1860)	大判錦絵３枚続	横浜市中央図書館
27		横浜具物双六	隅田了古	海老屋林之助	申十改	万延元年 (1860)	錦絵	横浜開港資料館
28		横浜本町港崎町振分雙六	五雲亭貞秀	糸屋庄兵衛	申十改	万延元年 (1860)	大判錦絵４枚組	横浜開港資料館
29		万国入舶寿語録	歌川広重(２代)	上州屋金兵衛	申十改	万延元年 (1860)	横大判錦絵２枚続３段	横浜開港資料館
30		新板異人双六	歌川芳員	有田屋清衛門	申十改	万延元年 (1860)	横大判錦絵２枚続２段	横浜開港資料館
31		横浜細見大雙陸	五雲亭貞秀	山本平吉	申十改	万延元年 (1860)	上大判錦絵３枚続、下横大判錦絵２枚続	神奈川県立歴史博物館
32		岩亀楼幷ニ異客之図	歌川豊国(三代)、五雲亭貞秀	丸屋徳造	申十一改	万延元年 (1860)	大判錦絵３枚続	横浜開港資料館

no.		作品名	作者	版元	改印	出版年	形状	所蔵先
33		五ヶ国於岩亀楼酒盛の図	落合芳幾	木屋宗次郎	申十二改	万延元年(1860)	大判錦絵3枚続	横浜開港資料館
34		アメリカ人遊里屋図	歌川芳豊	菊屋市兵衛	申十二改	万延元年(1860)	大判錦絵	横浜開港資料館
35		武州横浜名所図 清国南京 みよざき町	歌川芳虎	遠州屋彦兵衛	申十二改	万延元年(1860)	大判錦絵	横浜開港資料館
36		横浜港崎廓岩亀楼異人遊興之図	歌川芳員	丸屋甚八	酉正改	万延２年(1861)	大判錦絵3枚続	横浜開港資料館
37		港崎廓岩亀楼 配手拭袋	歌川国盛(二代)画 あし園戯 述			万延年間(1860-61)頃	摺物	横浜開港資料館
38		横浜土産	五雲亭貞秀			万延元 - 文久元年(1860-61)	版本色摺2冊	横浜市歴史博物館
39		画稿　外国人遊興 横浜拳の図	歌川芳虎			文久元年(1861)頃	下図	横浜開港資料館
40		画稿　外国人遊興之図 裸踊り	歌川芳虎			文久元年(1861)頃	下図	横浜開港資料館

no.		作品名	作者	版元	改印	出版年	形状	所蔵先
41		横浜岩亀楼子供手踊之図	歌川芳員	丸屋甚八	酉正改	文久元年（1861）	大判錦絵3枚続	横浜市歴史博物館
42		外国人遊興之図	歌川芳虎	山田屋庄次郎	酉正改	文久元年（1861）	大判錦絵3枚続	横浜開港資料館
43		武州横浜外国人遊行之図	歌川芳虎	山田屋庄次郎	酉正改	文久元年（1861）	大判錦絵3枚続	横浜開港資料館
44		武州横浜八景之内 美代嵜乃秋の月	歌川芳虎	山田屋庄次郎	酉正改	文久元年（1861）	大判錦絵	横浜開港資料館
45		武州横浜八景之内 岩亀楼夜の雨	歌川芳虎	山田屋庄次郎	酉正改	文久元年（1861）	大判錦絵	横浜開港資料館
46		英吉利人 遊行横浜踊	歌川芳虎	遠州屋彦兵衛	酉正改	文久元年（1861）	大判錦絵	横浜開港資料館
47		亜米利加人 遊行酒盛	歌川芳虎	遠州屋彦兵衛	酉正改	文久元年（1861）	大判錦絵	神奈川県立歴史博物館
48		清国南京人 遊行横浜拳	歌川芳虎	遠州屋彦兵衛	酉正改	文久元年（1861）	大判錦絵	神奈川県立歴史博物館

no.		作品名	作者	版元	改印	出版年	形状	所蔵先
49		魯西亜婦人港崎遊覧	歌川芳虎	遠州屋彦兵衛	酉二改	文久元年(1861)	大判錦絵	横浜開港資料館
50		仏蘭西人岩亀遊興	歌川芳虎	遠州屋彦兵衛	酉二改	文久元年(1861)	大判錦絵	横浜市中央図書館
51		再改横浜風景	五雲亭貞秀	丸屋甚八	酉二改、酉六改	文久元年(1861)	大判錦絵 6 枚続	横浜市歴史博物館
52		岩亀楼扇面之図	歌川芳員	丸屋甚八	酉八改	文久元年(1861)	団扇絵	神奈川県立歴史博物館
53		横浜名所港崎町 仏蘭西人	歌川芳員	万屋吉兵衛	酉十改	文久元年(1861)	大判錦絵	神奈川県立歴史博物館
54		諸国異人双六	歌川房種	藤岡屋慶次郎	酉十一改	文久元年(1861)	錦絵	神奈川県立金沢文庫
55		横浜岩亀楼全図	歌川広近(二代)			文久 3 年(1863)頃	横大判錦絵 2 枚続 2 段	横浜開港資料館
56		横浜岩亀楼座敷之図	歌川広近(二代)			文久 3 年(1863)頃	横大判錦絵 2 枚続 2 段	横浜開港資料館
57		みなとのはな 横浜奇談	・菊苑老人	師岡屋伊兵衛		文久 2-3 年(1861-62)頃	版本墨摺	横浜開港資料館
58		御開港横浜正景 YOKOHAMA CHART	不詳	師岡屋伊兵衛		文久 4 年(1864)頃	大判錦絵 4 枚続 2 段	横浜開港資料館

no.		作品名	作者	版元	改印	出版年	形状	所蔵先
59		諸国名所 武州横浜	歌川広重(二代)、歌川豊国(三代)	伊場屋仙三郎	子極	元治元年(1864)	団扇絵	神奈川県立歴史博物館
60		横浜廓港崎町 岩亀楼一覧	歌川芳員			万延元 - 慶応 2 年(1860-66)頃	摺物	横浜開港資料館